

山村再生担い手づくり事例集Ⅲ

2016年3月

2016年3月

矢作川流域圏懇談会 とは…

矢作川流域は矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取り組みが必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることを目指す「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

山村再生担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」の作成を提案しました。2014(平成26)年度に第1集が刊行され、本冊子は第3集となります。

この事例集によって流域住民の中山間地振興に関する意識を啓発することを目指すとともに、その具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内全域でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることを目指します。



目 次

長野県

平谷村

- 1 飯伊森林組合平谷事務所 1

根羽村

- 2 天下杉 4

岐阜県

恵那市

- 3 タ立山森林塾 7

愛知県

豊田市

- 4 おいでん・さんそんセンター 9
- 5 野外保育とよた 森のたまご 11
- 6 農村舞台アートプロジェクト実行委員会 13
- 7 稲武山里体験推進協議会 16
- 8 老人福祉センターぬくもりの里 19
- 9 あさひ森の健康診断 21
- 10 あさひ薪づくり研究会 24
- 11 有間竹林愛護会* 26
- 12 あすけ聞き書き隊 29
- 13 山里センチメンツ 32
- 14 しもやま再来るプロジェクト 34
- 15 コレカラ商店・コレカラ農園・コレカラご飯 36
- 16 first-hand 39

岡崎市

- 17 額田木の駅プロジェクト 42
- 18 日近太鼓 44
- 19 鳥川ホタル保存会* 46
- 20 岡森フォレストーズ 49

蒲郡市

- 21 蒲郡市漁場環境保全協議会* 52

西尾市

- 22 島を美しくつくる会* 55

飯伊森林組合 平谷事務所

調査団体名 : 飯伊(はんい)森林組合 平谷事務所
 設立年 : 1976(昭和51)年
 団体URL : <http://hanishinrin.or.jp/>
 活動拠点 : 長野県下伊那郡平谷村内森林
 取材日 : 2015年12月9日

団体代表者名 : 飯伊森林組合西部支所 鈴木 元
 対応してくれた人の名前 : 鈴木 元
 調査員 : 近藤朗、石原淳、浜口美穂
 レポート作成者 : 近藤朗

活動内容

飯伊森林組合は、長野県最南部の飯田市、下伊那郡を所管する森林組合で、この下伊那地域(1市3町9村)の面積は1,929km²(森林率は86%と極めて高い)。1976年に14森林組合が合併し設立されたものであるが、2006年に飯田市森林組合とも合併するなど変遷してきているものの、この地域では根羽村(根羽村森林組合)と阿南町の和合地区(和合森林組合)は合併せず、独自の組合活動を展開している。

飯伊森林組合の保有施設としては、木材流通センター、きのこ流通センター(しいたけ)、小径木加工施設を運営する他、福利厚生施設「昼神荘」があり、ここで林業講座なども展開している。なお、管内は広く5つの支所がある(2008年再編)。

●**平谷事務所(平谷村)**・・・平谷村は飯伊森林組合の西部支所管轄(阿智村・平谷村、浪合村(2006年合併)と清内路村(2009年合併)は阿智村に合併している)であり、鈴木元さんは、この支所職員。平谷村は面積約77km²で、長野県で最も人口の少ない村として知られている。(2005年3月時点で589人、現在は480人程度とのこと)。村の96.7%が山林、組合では大体3,000～4,000haを管理している。

●**鈴木元さんのこと**・・・平谷村生まれで平谷村育ち、就職は長野市で別な仕事をしていたが、辞めて平谷に戻ってきた時に平谷の事を良く知っているだろうと見込まれ、声をかけられ現在の仕事に従事することとなった(2001年)。西部支所において主に平谷村を担当し、阿智村にも調査に出かける。2014年には森林施業プランナーに認定される。2012年には当地の経営計画を策定した。現在38才(取材時点)。

* 今回の取材は飯伊森林組合というより、主に平谷村で森林管理に取り組む鈴木元さんという視点で行っています

キャッチフレーズ

「人づくりは村づくり」～矢作川の源流の森からの発信

- ・ 総合的な観光立村を目指す長野県で最も小さな村のメッセージ
- ・ 都会になる必要はない

鈴木さんのモットー(何を大切にしているか)

● 水の循環は農林水産業のサイクルと同じ

・・・山に始まり田畑を潤し、人々の生活用水として活用され、海にそそぐ水は皆に恩恵を与えるもの。その水は皆で保全すべき。したがって、源流も地元の人間だけで守ってはいけなし、源流の人間だけでは守れない。未来の子供たちに返せるものを。

設立(入組)から現在に至るまで変化したこと

● 入組から活動・作業内容について大きな変化はないが、様々な補助金をいただき作業を実施しており、その中で間伐作業量が増えてきました。

● 平谷村について言えば、やはり人口の減少が大きい。私は現在平谷ではなく飯田市に住み通っている。これは子どものこと(遊び友達などの教育環境)を考えての事であり、これから人(特に子どもたち)をふやしていくこと、繋がりをつくっていくことが重要だと思います。

連携している団体・専門家・自治体など

平谷村(役場): 連携しているというより、村は私たちを何かと頼りにしている関係だと思います。例えば道の駅(R153)の山などでは、特に観光間伐を進めており、私たちに依頼が来ます(取材日当日もこの作業中でした)。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

鈴木さんの元で伐採等作業を行う造林チームは現在6名。その内3名が長野市、福島、福岡からの「Iターン」です。「平谷に住みたい」という方はおり、村営住宅など利用しますが、今後ずっと定住して下さるかどうかは鍵となります。木材の搬出作業チームは、造林班とは別に阿智村の衆を中心にを行っています。

「平谷村の鈴木さん」としては、消防団員であると共に、3人ほどの仲間で地歌舞伎に取り組んでいるところです。なお、お母様は、道の駅信州平谷内の「高嶺蕎麦」にて働き、五平餅の普及にも一役買っています。

現在直面している課題 ～ 今後やりたいこと

- 組合については入組から活動・作業内容について大きな変化はないが、林業経営そのものは、人手の確保を含めとても大変な状況になっている。
- 木材価格が安すぎる。現在7,000円/㎡程であるが、15,000円は必要であろう。
- 平谷の山は搬出用作業道が作りづらい地形であり、これを確保することが大きな課題である。
- 平谷の森のあり方について自分なりの考えはあるが、一方でまずは経営面を優先させなければならないジレンマがある。

【今後やりたいこと】

これらの課題解決を何とかしたい。ジレンマの中で現在模索中です。

チームオリジナルの質問 鈴木さんの考える平谷の森のあり方と伝えたいことは何ですか

今、私たちが取り扱っている生産林の他に、森には矢作川の水源地、保全林という意義・機能も大きく、川の近くであるとか、必要な場所においては、ナラなど原木林を増やしていきたい。生産林と原木林をきちんと分けて管理体制をつくるべきだと思う。現行の補助制度の中だけでこれを進めていくことには限界があり、山は個人所有で本当にいいのだろうかとも思う。水源地、原木林というのは村にとっても必要なものであるし、下流にとっても大事なはず。そろそろ、このことを国レベルで考える時代なのではないか。森を適正に管理するための林道・作業道にしても、山をくずさない事も重要であり、もっと公益的(公共)事業としての展開を望みたい。

取材者(近藤)からのメッセージ

今から20年ほど前、小さな息子を連れて初めてそり遊びをさせたのが平谷村のスキー場であり、頻繁に通いました。帰りには必ず道の駅信州平谷に寄り、「ひまわりの湯」に浸かっていました。我が家にとって、名古屋から平谷は最も身近な山村であり、矢作川の源流を意識させる存在でした。(当時は豊田土木事務所で矢作川など河川を担当) また、当時の平谷村は人間地上絵コンテストで優勝し、珍珍幕府と銘打った村おこしを展開するなど、非常に個性豊かな地域だというインパクトがありました。

今回の取材で懐かしさを覚えると共に、国道153号が私たち(まち)を源流(山)に誘う魅惑のルートになりえること、その可能性について思いが至りました。子どもがもう少し大きくなると浪合村(現阿智村)の治部坂高原スキー場や、ヘブンスそのはら(阿智村)へ、売木村など下伊那地域の日帰り温泉にもよく行きました。私の場合は子育てのためでしたが、この「山村再生担い手づくり事例集」調査により、矢作川源流域での数多くの地域のタカラモノが発見できました。まちにないものがここにある、人が育つために必要な何かがここにある、ということを感じさせる地域として発信したいですね。

写真



飯伊森林組合 平谷事務所 鈴木元さんと作業中の造林作業チーム(道の駅信州平谷付近)



整備されたヒノキ林と取材風景

天下杉

調査団体名 : 天下杉
 設立年 : 1992年頃(今から22～23年前)
 団体URL :
 活動拠点 : 長野県南信地域
 取材日 : 2015年 12月 18日

団体代表者名 : 以下6名全員
 対応してくれた人の名前 : 石原明子、石原久枝、浅井加恵子
 片桐淳恵、稲垣悦子、石原みちゑ
 調査員 : 近藤朗、石原淳
 レポート作成者 : 石原淳

団体名の由来

根羽村には、平成元年環境省(当時環境庁)の巨木調査により長野県下第1位(全国第6位)の巨木であることが認定された大杉(月瀬の大杉)がある。団体名は、この大杉から名づけられたものである。



所在地: 根羽村月瀬日影平
 樹高: 約40m
 幹回り: 約14m(目通り1.5m高)
 樹齢: 1,800年余り



活動のきっかけと活動内容

22～23年前、根羽村商工会の都市との交流事業の中で、根羽村大豆から「ふれ愛豆腐」が生まれ、お年寄りに配られた。その時、受け取ったお年寄りから「母親の手作りの味がした」「懐かしい子どものころの味がした」といった感謝が寄せられ、何か他に喜んでいただけることがないかと思いついたのが、演芸による慰問活動であった。主な活動対象は、老人福祉施設や身障者支援施設であり、活動内容は歌、舞踊、寸劇(シンクロ)、など多岐に及ぶ。また、活動場所は飯田市をはじめとする南信地域が主であるが、岐阜県や愛知県などの公演も行っている。

キャッチフレーズ

「幻の演芸集団(おひざ元の根羽村では活動しないため……)」

団体のモットー(何を大切にしているか)

見ていただく方々に喜んで頂けること。また、自分たちも楽しむこと。



設立から現在に至るまで変化したこと

当初は石原明子さん1名であったが、徐々に仲間が加わり、現在は6名体制で活動を行っている。活動の対象は、初め重度障害者が中心であったが、次第に老人福祉施設においても活動をするようになった。レパトリーについては、対象となる相手に合わせて時代にマッチした種目(スーダラ節、寅さん、ちゅらさん、じえじええ)も取り入れている。

連携している団体・専門家・自治体など

「ねば杉っ子餅」、「きくの会」、「活かまいかい」、「和(なごみ)」など根羽村内の多数の活動団体(これらはすべて女性のグループ)、飯田市、根羽村、売木村、喬木村、名古屋市、豊田市、恵那市、その他

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

身体障害者、特別養護老人ホームなど福祉施設を主とした慰問活動

現在直面している課題

団体の平均年齢が75歳を超えたこと。できる限り、楽しく頑張りたい。

今後やってみたいこと

山村再生担い手事例集でご紹介いただき、オファーなどがあつた際には、お役に立てる範囲にはなりますが、頑張りたいと思っている。また、そろそろ御園座公演もありかと考えている(笑)。

なお、ご期待いただいているシンクロの演技については、冬場の公演は遠慮させていただきたい。ただ、今年はオリンピックイヤーであるため、暖かくなったら披露したいと考えている。(ただし、体型とも相談したい。前にも増して見せられない状況となっている。)冬場に見たい方は、水着をお貸しすることは可能であるため、是非団体に加わっていただきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・特に必要性は考えてないが、出会った方々を大切に、感謝したいと思う。
- ・ありのままでよいと考えている。

チームオリジナルの質問1

<質問内容> 皆さんの活動の原動力はなんですか？

<答え> 皆さんに喜んでもらうことと、自分たちも楽しむことである。



手品の種明かしを受ける取材者

チームオリジナルの質問2

<質問内容> 初めからこのような勢いのある団体か？根羽の女性はみなこんなか？

<答え> この団体に無口でおとなしい人はいない。根羽の女性は皆こんなかと言えば、それは言い過ぎだが、概してパワフルな女性は多いと思う。それは、全国源流サミットの時に村の女性パワーを感じた。

その他、伝えたいこと

笑うことが健康に対して最も必要なことです。だから、「皆さん、私たちと一緒に笑いましょう！」

天下杉さん取材して

常に団員の方々に圧倒された取材でした。しかし、決して押し売りではないため、終始楽しい時間を過ごすことができました。特に印象に残ったのは、全てが手作りという事です。音響は、数々のカセットテープをラジカセに出し入れして再生するんです。そのため、再生時に曲が途中から始まったり、途中で切れたり、「今時これ？」と思いましたが、それが懐かしくて逆に新鮮で面白さを倍増させていました。舞踊、歌、寸劇、手品・・・団員すべてが主役になるばかりでなく、慰問される側も舞台に駆り出され、皆が主役になるのです。ただの傍観者にさせないことが楽しませる秘訣と感じました。山村再生担い手づくり事例集は、地域の活動的な若者が取材先になるものという先入観がありました。担い手が若者である必要はないとつくづく思い知らされました。

「天下杉の皆さん、月瀬の大杉に全く引け目を感じない団体ですね。これからもこの地域の『元気』を引き出してくださいね。我々は、取材を通して元気を取り戻しました！それから、1月に実施された地域部会では、山部会のメンバーの前で披露していただきました。皆さんの演技は、都市で生活する我々に潤いを与えて下さいました。夜の懇親会でも、天下杉さんの話題で花が咲きました。これからも、矢作川流域の人々に『元気』をお分け下さい。お願いします。」



司会進行と歌を披露する石原代表



飛び入り出演を依頼された皆さん



芸者姿で踊りと歌を披露する天下杉



反省会を兼ねた取材風景



熱演する団員



飛び入り出演を果たした山部会員1



飛び入り出演を果たした山部会員2



熱演に元気をいただきました！

NPO法人タ立山森林塾

調査団体名 : NPO法人タ立山森林塾
 設立年 : 2006年1月1日
 団体URL : <http://yudachiyama.sub.jp/>
 活動拠点 : 恵那市山岡地区
 取材日 : 2015年 12月 9日

団体代表者名 : 佐藤大輔
 対応してくれた人の名前 : 佐藤大輔、高草武臣
 調査員 : 近藤朗、浜口美穂、石原淳
 レポート作成者 : 石原淳

活動(事業)内容

特定非営利活動として主に以下の事業を行う。

- ①自然環境の保全にかかわる教育・啓発事業
- ②自然環境の保全にかかわる広報事業
- ③森林および地域文化情報の収集・提供および調査研究提言事業
- ④森林および地域文化研修・講習会

キャッチフレーズ

森・里・人が元気につながる



やまおか木の駅・薪の駅

会のモットー(何を大切にしているか)

各種講座・活動を通じて、森づくりの大切さを訴え、森林ボランティアを育成し、素人山主に安全で科学的な山仕事の愉しさを伝えることで、地域の森林再生のみならず、山村の活性化をめざすものである。

設立から現在に至るまで変化したこと

◆設立前～設立初期(2005年～2008年)・・・森の健康診断リーダー養成・山村の人材育成が主たる活動の時期

2005年10月に第1回土岐川・庄内川源流の森の健康診断が始まり、森の健康診断リーダー養成と山村の人材育成のためタ立山森林塾が始まった。2008年までに塾生を100名輩出し、塾の幹部や関係団体の主要な役職に就くなど一定の役割を果たした。そのため、一度は団体を解散する話が出た。

◆設立中期(2008年～2013年)・・・木の駅の運営が主たる活動の時期

2009年土佐の森・救援隊を視察し、地域通貨『森券』を活用した間伐材の有効利用を標準化することが検討され、実働部隊である「杣組(そまぐみ)」とともに本団体が運営の主体を担うことになった。同年12月に恵那市中野方(後の笠周)において木の駅プロジェクトの社会実験が行われ、9戸56tの丸太が集まり、森券で地元商店街も潤うことが証明できた。その後、全国第1号となる木の駅が本格的に始動し、会のモットーである山村の活性化が図られた。2011年より、笠周木の駅は「笠周木の駅実行委員会」に委ねられ、サポート的立場に退いた。その後、山岡地区で新たな木の駅を立ち上げ、花白温泉に薪ボイラーを導入した。この頃から活動の拠点は、北部の笠周地区から南部の山岡地区に移った。

◆現在

現在は、木の駅のサポート的立場を続けながら、恵那市の委託による「市民講座(間伐講習)」「森林体験イベント」を開講・開催している。また、株式会社BESSのCSR活動や株式会社リコーの社有林「リコーえなの森」の環境保全活動の支援を行っている。恵那市と連携協定を結んだ名古屋大学に対しては、「臨床環境学」の現地コーディネート(地元住民とのコンタクト)の支援など、地域・社会貢献の幅が広がっている。

連携している団体・専門家・自治体など

- 【官】 国土交通省、環境省、岐阜県、恵那市(素人山主の育成事業)
- 【民】 豊森なりわい塾、地域の未来・支援センター、NPO法人地域再生機構、株式会社花白温泉、NPO法人杣の杜学舎、株式会社BESS(CSRの支援)、株式会社リコー(社有林の環境保全活動の支援)
- 【学】 名古屋大学(2005年5月恵那市との連携協定を締結。森林活動を主とする現地コーディネート)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・木の駅プロジェクトのサポート・主動(笠周地区・山岡地区) ・間伐講習の実施(恵那市からの委託)
- ・民間企業のCSR支援 ・民間企業の社有林の管理支援 ・大学との共同研究・支援

現在直面している課題

これまで、目先の課題をこなすことに追われてきた。設立10年を機会に、一度立ち止まってこれまでの活動の反省と今後の活動の着地点を見据えたい。特に、これまでの活動は、目の前の課題に対して受動的な立場をとってきたが、今後は主体的に取り組みたい(主体的に取り組む対象をみつけない)。

今後やってみたいこと

- ・林野庁が行っている「森林・山村多面的機能発揮対策交付金」などのように、申請書類や報告など地元住民にとって作業困難な事務作業を支援したい。
- ・移住者との連携を深めたい。特に、移住を考えている人や地域の発展に危機感をもった人々を支援したい。現在は「夕立山森林塾」であるが、いずれは「夕立山山村塾」のような、より広い範囲で活動と支援を行いたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

これまでの人脈を大切にしながら、現状に固執することなく、新たな人脈を築きたい。それには、恵那市だけでなく、長野県(根羽村ほか)や愛知県(豊田市ほか)などの流域の団体と連携することが大切だと考えている。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 連携する団体への支援活動は大変でしょう？

<答え> 『楽しいです！』

その他、伝えたいこと

- ・山村における課題は、山村だけの問題ではありません。流域全体の問題だと思います。
- ・人のつながりがあれば、なんでもできると思います。我々は、矢作川流域圏の皆さんと連携したいと考えています。是非、よろしくお願いします。

写真



佐藤大輔さん(代表)と高草武臣さん(事務局)



間伐の実演



薪ボイラーを活用する花白温泉



取材風景

おいでん・さんそんセンター

調査団体名 : おいでん・さんそんセンター

設立年 : 2013(平成25)年8月

団体URL : <http://oiden-sanson.com/>

活動拠点 : 豊田市足助町(足助支所2階)

取材日 : 2015年11月16日

団体代表者名 : センター長 鈴木 辰吉

対応してくれた人の名前 : センター長 鈴木 辰吉

調査員 : 松井賢子、沖章枝、大森正昭

レポート作成者 : 大森正昭

活動内容

「おいでんさんそんセンター」は市の出先機関だが、ここが何かをやるという機関ではない。ここは、まちといなかの皆さんをつなぐプラットフォームとして、住民自身が社会課題を解決するために、民間同士のつながりのサポートを行っている。

たとえば、旭地区の東萩平では当センターの仲立ちにより、H26年に住友ゴム(まち)と東萩平町(いなか)とで、『いなかとまちのパートナー協定』を締結させ、郷土の森づくり活動を永続的なものにした。また、まちの小学生との[セカンドスクール]や、草刈り応援隊を始め、まちといなかをつなぐ幾つもの活動を行っている。

キャッチフレーズ

まちとむらをつなぐ“プラットフォーム”

会のモットー(何を大切にしているか)

競争ではなく、支え合って豊かになる未来の社会、賛同出来る人は誰でもどうぞ！。

設立から現在に至るまで変化したこと

オープン当初、センターとして何をやっていくかということで、プラットフォーム会議に色々な団体に集まっていただき、話し合っ、「おいでんさんそんセンターの描く未来」を創造し、課題解決に向けた専門部会を設けた。

現在、「地域スモールビジネス研究会」「移住・定住専門部会」「次世代育成部会」「食と農専門部会」「森林部会」の5つの専門部会をつくり、多くの皆さんが活動するなかで、ゼロから圧倒的ネットワークと拡がりによって百人力となっている。

以前は、いなかに働く場をつくり過疎化を食い止めようと考えていた。しかし、分かったことは、いなか暮らしがしたいからいなかにくる、来てから仕事を探す、ということ。

この5年で101世帯246人が来られたが、皆さん仕事があってここに来たわけではない。

連携している団体・専門家・自治体など

名古屋大学、矢作川水系森林ボランティア協議会、豊田森林学校など多数。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

5つの各専門部会が中心となり、行政につきものの縦割り対応ではなく、多くの課題を一挙に解決すべく活動している。例えば「森林部会」では、いなかで暮らしたいという、Uターン、Iターンの若者に、林業をボランティアでなく生業にすることを目標に、夏に農業、冬には林業が出来るよう「半農半林塾」を立ち上げるなどして支援している。

現在直面している課題

林業では、間伐しなければいけない森林が山ほどあるが、材価が安く、切り捨て間伐は補助金しか出ないため、収入は時給800円にも満たない。でも諦めずにやっている。

このままでは農地も山林も集落も消滅し、荒れ地になってしまう、なんとかこれを防ぎたい。今後10年で市内の4割の農地が、跡継ぎが居ないなどのために耕作放棄され荒れていく。農地が荒れれば、そこに暮らす理由がなくなり、農村は消えていく。この課題には力を入れ取り組んでいる。

設立から3年経ち、現在スタッフ7名で運営しているが手一杯である。今後どう運営していくのか、どう進化させていくのか、3年を節目に民営化を含めその方針を議論していく。

今後やってみたいこと

いなかの住民は、農家でありまた林家でもあるが、仕事の中で「農」と「林」が交わることがあまりない。一緒になってやれることがないかと相談を受けた。かつての農と林のつながり、で何かやれることがないか考えている。

また、エネルギー発電モデル集落(薪ボイラー、バイオマス発電、電気自動車など)を現実に行おうと言う話が出ているが、どこから手を付ければよいのか今、模索している。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

5つの専門部会には大学の先生を含めた大勢の専門家がおり、このネットワークにより何事か有っても誰かが助けてくれる。役所の比ではなく百人力だ。

冊子「里CO」の感想

「里CO」という本がいい: とよたで見つけた ミライの山里暮らし、田舎から日本のミライを変える座談会、とよたの田舎へ山里女子8人の話など、思わず手にとり、そして読みたくなるきれいなデザイン、すぐに購入させていただきました。(税込 ¥1,000)

その他、伝えたいこと

行政は、税金を集めその税金を使って社会問題を解決する。しかし、今後人口が減り経済が縮小すると、多くの社会資本を税金でまかなってはいけない時代が来る。

行政スタッフも減らされる一方で、課題は増えていく。これを解決するには住民自身が主体になってやって貰うしかない。これらを効率的に行うためには、行政が様々な組織・団体・企業などと、住民とのつながりやサポートの場を提供するという役割になっていく必要がある。「おいでん・さんそんセンター」はそのような未来の市役所を模索している。

農山村は今、高齢化、人口減少にさらされているが、これは未来を先取りしているだけで、今後30年もすると日本中が今の農山村と同じ状態になる。今、いなかかダメだと諦めると、30年後の日本を諦めるということ。へこたれてはダメ。

いなかだから住みたいという人達が居る、いなかをよりいなからしくすれば、いなかはもちこたえられる。都市の病んでいる部分を助けつつ、都市の人達にいなかの課題解決を手伝ってもらう、そのための機関としてさんそんセンターが間に入る。

写真



市役所時代よりも元気そうな
センター長の鈴木辰吉さん

「暮らしの糸をつなごう」
手作りの立体看板



冊子「里CO」とよたの
田舎へ、山里女子
8人の話

「おいでんさんそ
んセンター」
のパフレット



野外保育とよた 森のたまご

調査団体名 : 野外保育とよた 森のたまご
 設立年 : 2010年
 団体URL : <http://blog.goo.ne.jp/morinotamago2010>
 活動拠点 : 豊田市の里山
 取材日 : 2015年12月15日

団体代表者名 : 遊佐美絵
 対応してくれた人の名前 : 遊佐美絵
 調査員 : 桑淳、溝口裕太、Siti Norbaizura Binti Md. Rejab
 レポート作成者 : Siti Norbaizura Binti Md Rejab

活動内容

森の中で一日を過ごす「森のようちえん」。2010年に設立され、現在3人のコアスタッフと週1回の親当番の協力で運営している野外のようちえんです。17人の3・4・5歳の幼児と4人の大人が毎日自然の中で自由に遊んだり、探検したりして、体を動かしながらさまざまなことを身につけます。木曜日と金曜日には同じ場所で活動を行います。それ以外の日には豊田市のいろいろなところで現地集合、現地解散という形のようちえんです。人数の少ないようちえんでみんな家族のように関わり畑で野菜を育てたり、川の生き物をと触れ合ったり、餅つきやおまつり等の行事を行い、天気や季節に合わせて活動を計画します。晴れの日でも雨の日でも外で経験を通じて学んでいます。

キャッチフレーズ

ちいさなようちえん おおきなかぞく

会のモットー（何を大切にしているか）

自然の中で出会う一つ一つの体験が、満足感や達成感、迷い・悔しさに繋がる。

色んな想いを育てるために、また子ども同士の遊びや、ケンカの関わりの中で育つものを大切にし、大人は答えを持たず、ただ子どもと子どもをツナグ役割をします。

大人の指示を持つ子ではなく、自分から考え行動する子になって欲しいと願っています。

小さな森のたまごだから、大人も子どももぶつかり合い育ち合う。

そして自分らしく生きる。一人一人が大切な家族。

設立から現在に至るまで変化したこと

子どもだけでなく大人も一緒に成長します。（例えば：野菜を育てるためにママたちが自分でいろいろと勉強し、年上の方からも学んで実行します。失敗しても勉強の過程として受けること。）

連携している団体・専門家・自治体など

森のようちえん てんとうむし、豊田市 とよた市民活動センター、森のようちえん全国ネットワーク

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

山村再生には直接つながっていませんが、森のたまごに通っている子どもたちは、時間はかかるけれど大きくなったときに、今自然の中で身につけたこと・経験したことを、大人になっても体のどこかで覚えていて生かすことができます。

現在直面している課題

- ・活動場所・建物がないこと
- ・行政からの援助・サポートが限られていること
- ・周りの認知度の低いこと

今後やってみたいこと

豊田市内にもっと森のようちえんを増やしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

愛知県の森のようちえんのネットワーク。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞子どもたちが小学校に入学したら、教室内で授業を受けることに対しては抵抗ありませんか？

＜答え＞野外で自由に遊べた森のようちえんとちがって、学校に入学したら座って授業を受けることがはじめての経験となるので、その新鮮さを楽しんでほしい。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞子どもたちが外で遊んだりするのに不審者などの心配は？

＜答え＞ありますが、情報発信のときに場所の特定や子どもの個人情報・顔などを特に気を付けます。

写真



いつも自由に元気に動いて、自分がやりたいことを自分で決めて行動してる子どもたち。

農村舞台アートプロジェクト実行委員会

調査団体名 : 農村舞台アートプロジェクト実行委員会 団体代表者名 : 伊丹靖夫、かとうさとる
 設立年 : 2010年 対応してくれた人の名前 : かとうさとる
 団体URL : <http://www.cul-toyota.com/>
 活動拠点 : 豊田市内農村舞台 調査員 : 桑淳、Siti Norbaizura Binti Md. Rejab、溝口裕太
 (公財)豊田市文化振興財団文化部 レポート作成者 : Siti Norbaizura Binti Md. Rejab
 愛知県豊田市小坂町12-100
 取材日 : 2015年12月15日

活動内容

農村舞台アートプロジェクトは、豊田市内に点在する農村舞台群を地域の文化資源として活用し、伝統と創造をテーマに市民文化の創生を目指す市民プロジェクトとして発足しました。豊田市内に点在する農村舞台の活用を図るために、アートプロジェクト(個展形式の作品展)やライブプロジェクト(劇場形式のダンスやジャズなどのライブ公演)の開催や、農村舞台に関係する伝統文化の創造的な再生に向けた取り組みとして、小田木人形座の再生やアート・イン・レジデンスの試行など地域との協働を進めています。

キャッチフレーズ

農村舞台の保存と活用

会のモットー(何を大切にしているか)

<農村舞台の活用>

農村舞台は保存されたが、この舞台が人々から見向きもされなくなったということではいけません。地元の人が楽しくワイワイと使える場、たくさんの人が訪れる活気のある場となるよう目指しています。

<地域資源の活用>

各地域の財産である舞台を活用して開催されるアートやライブには、可能な限り地元有缘のあるアーティストを選んでいきます。地域の空気感を大切に、地域と溶け込めるアーティストが、地域を盛り上げることに長けていると考えています。

<伝統的な舞台と、新しいアートの融合>

伝統的な舞台で伝統的な歌舞伎や人形浄瑠璃を上演するだけでなく、新しいアートとコラボレーションすることも大切です。これまでに、コンテンポラリーダンスやオペラ、バレエなど、農村舞台とは相容れないと思われるアートとの融合を図り成功を収めることで、新しい価値を創造しています。

設立から現在に至るまで変化したこと

2010年に実行委員会が設立されて以降、豊田市内の農村舞台の調査を実施し「豊田市の農村舞台絵地図」に全84舞台の全容をまとめるなど、現状の把握を進めてきました。これに加えて、舞台を活用した作品の展示や、歌舞伎、ジャズのライブ上演など、軌道に乗っているプロジェクトが複数あります。また、伝統の創造的再生として小田木人形座の再生に取り組むなど、更なる舞台の活用方法についても模索しています。

連携している団体・専門家・自治体など

農村舞台を保有する各自治体、アーティスト、(公財)豊田市文化振興財団、NPO法人豊田加茂菜の花プロジェクト、小田木人形座準備会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

豊田市内の中間山地に現存する使われなくなってしまった農村舞台の実情の調査や、調査結果を農村舞台絵地図にまとめるなど情報の集積を図っています。また、農村舞台を保存するだけでなく、これらの活用を目指した作品展示や、歌舞伎、人形浄瑠璃、オペラ「蝶々夫人ファンタジー」、ジャズライブの上演などを企画運営することで、市内に点在する84棟の農村舞台に対して、アートという側面から新たな価値の創造を目指しています。

これらの活動は、地域住民が農村舞台の価値を再発見する契機となったり、地域の伝統文化を再生する動きに繋がるなど広がりを見せています。

現在直面している課題

<更なる農村舞台の活用>

市内に84ある農村舞台は、これほど多くの農村舞台があるとインパクトを与える数字である反面、全てを平等に活用することが困難であることも事実です。したがって、取り組みが進んでいる舞台がある一方で、活用が進まない舞台もあることから、全体の底上げを図っていく必要があります。しかしながら、少子高齢化が深刻な集落では個々人の農地を守るにも苦勞している現状があるなど、抱えている問題は農村舞台を有する自治体毎に千差万別です。その為、画一的な対策では、全ての農村舞台の活用を図ることは困難であり、各々の実態に即した対応策を丁寧に考える必要があります。

<プロジェクトの発展的継続>

様々なアート及びライブプロジェクトが企画運営されていますが、これまでの取り組みを継続しつつ、新しい企画を創り出さなければプロジェクトに新鮮味がなくなり、多くの人を魅了するプロジェクトを継続することが困難となる恐れがあります。今後も、地域の資源を大切にしつつ、ネットワークの充実を図ることで、新しいアートを創造していきたいと考えています。

今後やってみたいこと

実行委員会における、これまでの取り組みや反省点を網羅した「農村舞台アートプロジェクト白書」の作成や、アート及びライブプロジェクトの更なる充実、舞台に関わる伝統的な文化の再生、農村舞台群の市民利用の促進などに取り組みたいです。

また、地元の農村舞台をネットワーク化するために連絡協議会の設立や、全国各地の農村舞台との交流を進めることで、農村舞台群として日本遺産への登録を目指すなど、多くの可能性を模索しています。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

様々な団体の様々な取り組みについての情報が蓄積される必要があり、各主体において積極的に進められている状況であると思います。これに加えて、複雑な情報をまとめてコーディネートできるような人材が必要だと考えています。

チームオリジナルの質問

<質問内容>農村舞台とはどういったものですか？

<答え>江戸時代後期から明治時代にかけて、年1度の余興を楽しむため各集落の神社境内に建てられたものです。この農村舞台は、農山村や漁村にある営業用ではない舞台の総称で、秋田から宮崎まで広く分布していますが、飛騨・東濃地域、南信地域、奥三河・豊田市東部/北部一帯には全国の約3分の1の舞台が集中しています。娯楽の乏しかった農山村では、舞台で開催される氏子の祭礼や奉納される地芝居、人形芝居は華やかな年中行事となっていたことが想像できます。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞農村舞台にはどのような装置がありますか？

＜答え＞舞台によって大きく異なりますが、廻り舞台（床を回転させて芝居の場面を転換させる）、せり（役者を舞台上げたり、下げたりする）、太夫座（三味線を弾いたり語りをする場所）、下座（芝居に合わせて囃子を演奏する場所）、バツタリ（舞台を広くする装置）など、歌舞伎などを上演するために必要な装置が整えられている舞台があります。しかしながら、市内にある農村舞台の全てに十分な装置があるのではなく、建築当時の各々の地域の実情が反映された、個性的な農村舞台がそれぞれの地域に残っています。

その他、伝えたいこと

プロジェクトの実現には、行政などの支援は欠かせません。しかしながら、様々な主体の支援を受けることを前提とするのではなく、自治区のみなさんや、アーティストのみなさんと一緒になって、プロジェクトを成功させる為にやれることは何か考えることが大切であり、お互いのコミュニケーションから素晴らしい解決策が見出せると信じています。

写真



深見農村舞台



取材の様子(かとうさとる氏)



農村舞台の構造(提供: かとうさとる氏)

稲武山里体験推進協議会

調査団体名	稲武山里体験推進協議会	団体代表者名	大内政春
設立年	2005年	対応してくれた人の名前	村瀬登美
団体URL	http://inabu-kankou.com/don_howto.html		
活動拠点	愛知県豊田市武節町針原15番地	調査員	宇野利幸、Siti Norbaizura Binti Md. Rejab、溝口裕太
取材日	2015年11月16日	レポート作成者	溝口裕太

活動内容

稲武山里体験推進協議会は豊田市稲武どんぐり工房を拠点に、こだわりを持つ地域のインストラクターと稲武を訪れる人々との出会いの場を体験プログラムを通じて提供している。ここには、自然体験(面ノ木原生林ハイキング、川遊び)、農業体験(いも掘り、米作り)、工芸体験(竹細工、木端細工、ストラップ作り)、味覚体験(五平餅作り、そば打ち、こんにゃく作り)など様々な体験が準備されており、訪れるグループ、団体、家族の希望に応じてコーディネートすることでニーズに沿った体験プログラムを提案している。

キャッチフレーズ

稲武を訪れた人と地域の人との出会いをコーディネート

会のモットー(何を大切にしているか)

稲武を訪れた人に、稲武の風を感じてもらうことを大切にしている。そして、訪れる人のニーズに合ったプログラムを準備すると共に、工夫とこだわりを持つインストラクターとの出会いの場を設けることで、訪れた人と地域の人がお互いに素敵な時間を過ごせるお手伝いをする。

設立から現在に至るまで変化したこと

設立当初は他では出来ない本格的な体験(炭焼き)や、小中高校生を対象とした教育旅行を念頭にプログラムが開発された。こういったプログラムは、モニターツアーが開催されるなど旅行会社の関心を引くことはできたものの定着には至らなかった。そこで、道の駅(どんぐりの里いなぶ)に立ち寄った方が数時間で体験することが出来る体験を増やすなどプログラムの大幅な見直しと、訪れる団体や家族のニーズに沿った体験をコーディネートするようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市(稲武どんぐり工房を所有)、いなぶ観光協会(稲武どんぐり工房を管理)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

稲武地域の里山資源の掘り起こしと、山村再生に欠かすことができない都市部の人々にこの地域を好きになってもらうことが活動の中心である。普段から各家庭で作られている五平餅やこんにゃく作りを訪れた人に体験してもらうことが、稲武地域の人や農産物の掘り起こしに繋がっている。大切なのは、稲武には大切な里山の資源が豊富に眠っているということ、地域の人々が自覚することである。また、体験プログラムを通じて稲武の風に触れた人々の中から、稲武に移り住んでくれる人や、頻りに遊びに来てくれる人が増えることが、山村再生に不可欠だと考えている。

現在直面している課題

今後も体験プログラムを維持し、拡大するために地域のインストラクターやかかわる人を増やさないといけない。また、インストラクターやかかわる人を増やすことが、この体験プログラムの認知度を高め、訪れる人を増やす結果に結びつくと考えている。

今後やってみたいこと

比較的短時間で体験できるプログラムのニーズが高まっていることから、新しい体験プログラムを開発し充実を図りたい。いまのところ、道の駅(どんぐりの里いなぶ)に訪れた人が、簡単に稲武の味覚や工芸に触れ合う機会が十分でないことやリピーターを増やすために、短時間かつ少人数(家族連れ)で体験できる石窯料理(ピザ作りや道の駅で購入した食材を調理して食べるなど)の企画を考えている。こういった取り組みが稲武の滞在人口を増やすことに繋がると考えている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

今後も地域を訪れる人を維持し増やしていくには、魅力的な体験を準備することが不可欠である。その為のアイディアは地域の中に眠っており、地域文化の発掘が大切となる。しかしながら、地域の魅力的な文化は地域住民が気づかないことも多く、地域外在住の人や高校生・大学生との交流の中から発見することも多い。したがって、稲武を訪れる人と地域住民との交流をいっそう加速させたい。

主体的に情報を発信し、人を呼び込む方法として旅行業への登録が考えられる。今後は、いなぶ観光協会といっそう協力することで、こういったアプローチの仕方も検討していきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>どんぐり工房へ訪れる人の地域や、年齢層はどのくらいですか？

<答え>豊田市域の人が最も多く、名古屋市、浜松市という大まかな構成になっている。数年前は、祖父母と孫という組み合わせが多かったが、最近は近隣のキャンプ場などへのアクセスの途中で、工房へ寄ってくれる家族連れが増えている。また、トヨタ生協の会員や子ども会などの親子連れが1回に100名程度参加される体験プログラムも年2〜5回ほど開催している。

チームオリジナルの質問

<質問内容>人気な体験プログラムや、リピーターが多いものにはどういったものがありますか？

<答え>人気がある体験プログラムのひとつとして名倉川や根羽川での川遊びがある。当初は子供たちの安全管理面で非常に神経を使ったが、現在では安全面やプログラムの進め方などを勉強し軌道にのってきた。子供たちは箱めがねやタモを持って、時の経つのを忘れて楽しんでいる。また、リピーターが多い体験にはピザ作り体験がある。本格石窯を使いロケーションのよい開放的な空間で粉から自分で作って食べるので、とても人気なプログラムとなっている。

その他、伝えたいこと

最近では、稲武の子供たちも自然から遠ざかっている。安全面から下校時は寄り道することなく自宅へ帰る。家に帰ると都市の子供たちと同じように黙々とゲームをしていると聞く。子供たちが自然とふれあうことから遠ざかってしまった。この体験プログラムは、稲武を訪れた人にとっては貴重な経験になるかも知れないが、自然と遠ざかってしまった住民が、子供も大人も地域の自然と文化を思い起こす大切な機会になると思う。

また、自然は人間の思い通りにならない。それは、畑に実っているとうもろこしの収穫体験でも同様である。旅行パンフレットには開催日や、もらえるとうもろこしの本数が記載されているかも知れないが、天候によって期待通りにならないこともある。もちろん、訪れる人の期待に即した体験プログラムになるように最大限の努力は惜しまないが、すべてが人間の思い通りになるわけでないことを知って貰うことも自然体験プログラムの醍醐味かもしれない。

まずは稲武の風を感じて欲しい。時間に余裕があれば稲武の文化を体験プログラムから知って貰いたい。そして、稲武を好きになってくれた人が、頻繁にこの地域を訪れてくれると嬉しいし、この中から稲武へ移り住んでくれる人が現れるのも嬉しい。

写真



豊田市稲武どんぐり工房
(明治12年の民家を移築)



取材の様子(村瀬登美さん)



どんぐり工房の内部



木端細工の見本

老人福祉センターぬくもりの里

調査団体名	老人福祉センターぬくもりの里	団体代表者名	永井晴彦（豊田市社会福祉協議会旭支所長）
設立年	2000年4月1日	対応してくれた人の名前	永井晴彦、下平枝里奈
団体URL			
活動拠点	豊田市旭地区	調査員	沖章枝、大森正昭、松井賢子
取材日	2015年 12月5日	レポート作成者	松井賢子

活動内容

旧東加茂郡旭町が、平成12年に「旭町福祉センターぬくもりの里」を開館。旭町社会福祉協議会が管理、運営の委託を受ける。それにともないデイサービス事業を開始。また、平成17年度の市町村合併に伴い豊田市となり、「豊田市老人福祉センターぬくもりの里」と名称が変更される。平成21年度に「地域包括支援センター」が設置。

開館当初より「ぬくもり祭」を実施し、毎年旭地区のボランティア団体による出演・出店等の催しがある。また、平成23年度より「地域に開かれたぬくもりの里」を目指して、名古屋造形大学と提携し、「ぬくもりの里・やさしい美術作戦事業」を実施。廊下には利用者方の共同で制作した作品や、浴室にはモザイクタイルが展示されており、来館者の目を楽しませてくれる。さらに、地域の児童、生徒の福祉学習の場ともなっている。

平成26年度に開館15周年を記念し、マスコットキャラクター「ぬっくん」が誕生した。「ぬっくん」は、地元住民の多数の応募作品より選ばれた母子の共同作品であり、チャームポイントのつぶらな黒い瞳で、みんなに元気を与えている。

キャッチフレーズ

笑顔と支えあいのまち・ぬくとい旭（「地域に開かれたぬくもりの里～老いをオープンに～」）

会のモットー（何を大切にしているか）

「ぬくとい旭」を目指した地域づくり、また「豊田市老人福祉センターぬくもりの里」を地域に開かれた施設にしていくことに重きを置いている。また、ぬくもりの里デイサービスセンターの利用者方が有意義な一日を過ごすことのできる施設を目指している。

「ぬくもりの里・やさしい美術作戦事業」を展開していく中で、利用者の方たちが協力して美術作品を制作していく過程が職員と利用者、利用者同士のコミュニケーションとなっている。さらに、出来上がった喜びや自己肯定感を養い、利用者の能動的な取組みと笑顔につながっている。

設立から現在に至るまで変化したこと

当初は介護施設というイメージが強かったが、利用者、各世代の地域住民が参加する「ぬくもりの里・やさしい美術作戦」の取り組みにより、少しずつ当時のイメージを払拭し、地域の福祉拠点施設として認知されつつある。また、この事業を通して、関係機関との連携が密になってきている。

なお、平成27年度から、豊田市地域福祉活動計画に基づいて、地域福祉活動の推進に取り組んでいる。福祉特派員制度を創設し、地域住民と顔の見える関係づくり、さらには地域に親しまれる福祉施設となるように努めている。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市・交流館・名古屋造形大学・中京大学・地元の小中学校・こども園・地域のボランティア団体等

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

唯一の旭地区福祉拠点施設のスタッフが、より質の高いサービスが提供できるように研鑽し、魅力ある施設となるように取り組んでいる。

現在直面している課題

人材不足・・・介護職員やボランティア等の福祉の担い手の不足。
社会資源不足・・・福祉施設や医療機関が限られている。
公共交通の整備が必要となっている。

今後やってみたいこと

- ①「笑顔とささえあいのまち、ぬくとい旭」を目指して、地域住民との協働による福祉のまちづくり。
- ②豊田市地域福祉活動計画しゃべりカフェぬくもりの充実を図り、地域住民の交流と憩いの場づくり。
- ③旭地区高齢者の生きがいとなっている農業の取り組みの充実。農業を通しての都市住民との交流の場づくり。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ①福祉に関するニーズの把握。地域住民との顔の見える関係づくりを行い、地域福祉に関心のある人材の発掘。
- ②地域住民への周知。
- ③旭地区の取組み状況と都市住民のニーズの把握とマッチング。関係機関との連携。

チームオリジナルの質問

<質問内容> あさひめくりの制作について。

<答え> 「ぬくもりの里・やさしい美術作戦事業」に関わったスタッフが有志によるチームを立ち上げて検討している取組みである。ぬくもりの里としては、支援、応援していく。
あさひめくりとは、旭地区の伝統行事・ことわざ・郷土料理・ならわし等の後世に残したいことを日めくりにとまとめる予定である。

チームオリジナルの質問

<質問内容> ぬくといという言葉の意味は。

<答え> あたたかい。

写真



右から二人目が支所長の永井さん、その左が下平さん



おしゃべりカフェ
ぬくもり



皆さん楽しそうに過ごされていました



モザイク
タイル

あさひ森の健康診断

調査団体名 : あさひ森の健康診断
 設立年 : 2015 年
 団体URL : -
 活動拠点 : 豊田市旭地区
 取材日 : 2015 年 11 月 12 日

団体代表者名 : 藤谷常壽
 対応してくれた人の名前 : 鈴木辰吉
 調査員 : 高橋 伸夫、田中 五月
 レポート作成者 : 田中五月

活動内容

豊田市旭地区で地域住民主体の森の健康診断を行う。矢作川森の健康診断をステップアップしたものとして取り組み、三つの特徴がある。

1、子ども達を含む地域住民主体の取り組み。2、調査密度が濃く、精度が高い。3、人工林だけでなく、天然林の調査も実施する。

調査は2015年より3年継続して実施し、80地点の人工林、9地点の天然林の調査を実施する。

キャッチフレーズ

森から始める持続可能な地域づくり

会のモットー(何を大切にしているか)

最終的な目標は地域コミュニティを残し、未来に引き継いでいくこと。それを考える切り口として農業や旭では面積的に非常に大きい森などがある。

森の健康診断でも「何とかしていくんだ！」というメッセージをこめて活動していく。

設立から現在に至るまで変化したこと

「やれる」という自信がついた。

実は第1回目の参加者募集では非常に苦労した。本番三週間前にも申し込みが都市の方を中心に30余名という状況で、一瞬「無理かな？」と覚えることもあった。しかし、その後の奮闘で約100人の参加があり、終了後には地元の方から「周りにも広げていく」という良い感触の感想を聞くことが出来た。

連携している団体・専門家・自治体など

矢作川森の健康診断実行委員会、豊田市、森林組合、旭木の駅プロジェクト、あさひ薪づくり研究会。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動は森の健康診断だが、それを子どもを中心とした地域住民で実施していく。

今年も子どもが参加できるようにと夏休みの後半に日程を設定したが、後から後から行事が重なり子どもは一人の参加にとどまった。しかし、来年は更に綿密に調査を行い、なんとか子どもを巻き込んでいきたい。

現在直面している課題

想像以上に森の健康診断の意義が地域に理解されていないので、この理解を広めていかなければならない。また、中心人物が皆とても忙しい。一人何役もこなしている状況のため、会議にもなかなか全員が参加することが出来ない。

今後やってみたいこと

森の健康診断の結果を、実際の森づくりに活かしたい。100年後、森をどうすべきかというランドデザインを行いたい。このために天然林の調査も行う。今は伐採した木を搬出出来ないような所まで人工林になってしまっている。これを針広混合林にしていく。一度人工林となってしまった森を戻すことが並大抵のことでないことは有識者の意見でもわかっているが、森林をどうしていくかは、旭にとって地域づくりをどうしていくかと同じ意味を持つ重要課題。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

森づくりに関する専門知識が必要。

しかし、森づくりに関しては、矢作川森の健康診断メンバーが協力してくれるはずで、これ以上ないというくらいのメンバーのため、専門知識についてはあまり心配はしていない。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

なぜ天然林の調査まで活動を広げているのですか？

<答え>

現状、木材を出せないところまで人工林を広げてしまっている。「ここは天然林のままだがよい」という場所がある。森の未来ランドデザインを実行する上で、針広混交林を作るための調査材料となる。

その他、伝えたいこと

森の健康診断を行う背景のお話がとても印象的でした(田中)。

以下は鈴木さんの談です。

--

元々の想いは地域のコミュニティを何とかしたいということ。

私達の世代が子どもの頃には美しい田んぼや畑、手入れのされた山林があった。

のどかさや豊かさが感じられる美しい里山の風景があった。

しかし、高度経済成長期、みな豊田市の工場にマイクロバスで通うことが当たり前の生活となった。

豊田市に近いという立地、時代背景などがあったのだが、今見渡すとかつてあった田んぼや畑、美しい山林は荒れてしまっている。

このような状況の中で、今このあたりはムードが二極化している。

・どうにもならんぞ、なるようにしかならんだろうと日々を暮らす

・何とかしようと動き始める

後者、何とかしようと動き始めると切り口として、農業や森、農村文化といったことを選んでいる。

旭では土地利用の81%が森林である。多くの面積をもつ森に関心がありながらも、打つ手を模索していた時に矢作川森の健康診断から声がかかって取り組むことになった。

森の健康診断も最終的な目標は、地域を何とかする、という目標に向かっている。

森を切り口にして、皆の意識をあげていき起爆剤としたい。

森の未来ランドデザインは非常に難しいはずだが、やることで大きな活路になる。

--

写真



←取材風景

↓当日説明風景



←集合写真



←子どもも調査



↑来年はもっと子どもが増えるはず！

あさひ薪づくり研究会

調査団体名 : あさひ薪づくり研究会
設立年 : 2014(平成26)年2月
団体URL :
活動拠点 : 豊田市東萩平町
取材日 : 2015年12月5日

団体代表者名 : 安藤征夫
対応してくれた人の名前 : 安藤征夫
調査員 : 高橋伸夫、大森正昭
レポート作成者 : 大森正昭

活動内容

あさひ薪づくり研究会は、旭木の駅プロジェクトによる間伐材の販売方法では採算が合わないため、もう少し付加価値の高いものをつくらうと、旭木の駅プロジェクトの中の10人でつくった。

旭木の駅プロジェクトは現在チップ販売だけで、市の補助があるものの採算的に苦しい状況となっている。このため、あさひ薪づくり研究会で間伐材を薪にして儲け補填している。平成27年からはストーブ販売も行っている。

薪の材は、旭木の駅プロジェクトから購入するものと、直接購入との2種類があり、自分達も忙しいため、直接購入する分については、玉切り済みならより高価に買い取る仕組みもつくった。

これらがあさひ薪づくり研究会のハード事業。

あさひ薪づくり研究会のソフト事業として、平成26年8月17日からツリーハウスづくりを一般公募し、30家族108名の親子と一緒にツリーハウスや遊具をつくりながら毎月2回の活動を行っている。

この活動は、小さい頃から森に親しむことにより、実体験として空気や水を育む森の大切さを分かってもらい、この子達が大人になった時、森の大切さや山の管理の大切さを理解出来るようにしている。

キャッチフレーズ

やる気があれば何とかなる。

会のモットー(何を大切にしているか)

山を自分自身が体感する。次世代のために森を維持する。

設立から現在に至るまで変化したこと

計画したことがスピード感を持って着実に進んでいる。例えば、平成26年の2月に会を設立しその年の9月から薪が売れ、百二十万の売り上げがあった。

販売先は、田舎では売れないので知立、岡崎、安城、春日井など都会への販売である。

ツリーハウスは、平成26年の8月に始め、既にハウスや園地・遊具も出来つつあり、順調に進んでいる。

また、子ども達の家族を対象にしたツリークライミングも年2回行っている。

連携している団体・専門家・自治体など

愛知学泉大が、平成28年からまちづくり活動の授業として、この地域の課題を一緒に解決していくことを単位として認め、1年生から3年生までの3年間かけて学習する仕組みをつくらうとしている。そのほかに名城大学、愛知産業大学や木の駅プロジェクトなど。「山村再生担い手づくり事例集」に載っている団体のほとんどみんな関係している。

また、ツリーハウスを造っている先生は、建築家の安井さん及びサツキとメイの家をつくった棟梁の中村さんで、月に一回来て頂いている。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

薪づくりは、間伐の推進を目的にしているため、針葉樹を優先している。従って8割が針葉樹で、広葉樹のみの薪が欲しいと言われる方には基本的には提供していない。

私は空き家を解消する活動をしており、今までに15軒50人ぐらいの世話をした。平成27年もこの近所の空き家を5月と7月にうめ、10月にも面接をし、22戸の集落で3軒の世話をした。

今、この自治区の定住促進部長として、こうした交渉の出来る人材を来年の4月までに10人は育てようと、毎月交渉術や空き家に関する法律などの勉強会を行っている。

現在直面している課題

「あさひ薪づくり研究会」から、研究会の文字をとって自立団体とすること。

今後やってみたいこと

荒れ農地の解消では、農地を農地として貸そうと思うと面積が広く、都会から来た人は機械がないと耕作出来ない。そこで荒れ農地を薪置き場として貸すことで、家族とともにここに来て木に親しみつつ山での遊びも出来、薪づくりを行えるように考えた。現在は畑2枚を薪置き場として無償で貸している。地主さんからは管理してもらえれば草刈りもせずにはすむと了解していただいている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

日々アンテナを高くし、たくさんの情報を収集したい。どんな情報でも良い、何かの役に立つ。例えば後進地の視察でも、やってはいけないことが分かり勉強になる。また、多くの人と話すこと、それも自分の地域外の人と話すことで多くの情報が得られる。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 色々な取組をされていますね。

<答え> 次の世代の森に係わる人を育成したい。

平成27年4月から始めた私塾「ガキ大将養成講座」は、座禅や山登りなどをつうじて、義理と人情のある子ども達を育てよう取り組んでいる。これには、名古屋、瀬戸、浜松などの街の子ども達が参加している。

さらに、名古屋の今池の子供会を呼び田植えや間伐をしてもらったり、また、ファミリー登山部をつくって、小学生を対象に年に数回の登山をしたりもしている。まだ退職前だが、仕事よりも忙しい日々を送っている。

その他、伝えたいこと

今は、自分の活動が流域圏としてみた時にどういう位置にあるのか把握出来ない。流域圏全体で顔の見える関係をつくっていくことが出来ないか。顔の見える関係になれば、山の人が海を汚してはいけない、海の人が山に木を植えたい、という気持ちが生まれるのではないか。

写真



右が「旭薪づくり研究会」と
「あさひガキ大将養成委員会」の安藤さん



新築中の
「さくら村
ツリーハウス



「旭薪づくり研究会」には、このよ
うな土場が5つある



「さくら村秘密基地」も増設中だ

有間竹林愛護会

調査団体名 : 有間竹林愛護会

設立年 : 2011年4月1日

団体URL :

活動拠点 : 豊田市有間町 竹ノ下地内

取材日 : 2015年11月26日

団体代表者名 : 原田茂男

対応してくれた人の名前 : 原田茂男

調査員 : 大森正昭、松井賢子、沖章枝

レポート作成者 : 沖章枝

活動内容 : 有間町竹ノ下地内の竹林を整備し、矢作川河畔の景観を良くし、河畔の散策ができる遊歩道を敷設して住民や来町者に安らぎと癒しの場づくりをめざす。

現在のハチク竹林は、昭和30年代まで畑だった。畑を耕作していた時は民家から川が眺められ、川風が家までとどいて心地よかった。畑を作らなくなったら竹が驚く速さで繁茂し真っ暗になって風も来なくなった。

平成23年、川岸の植生調査をした豊田市矢作川研究所の指導があって、会を立ち上げ竹林の整備を始めた。全体の整備計画を前期5年間、後期5年間に分けて、前期の4年が終わって、今年は、これまでの整備地の振り返り間伐をしている。

後期の5年間では、① 次の整備竹林の間伐 ② 遊歩道の整備 ③ 管理道路の敷設 ④ 竹林内の筍の採取と商品化を計画している。

豊田市のわくわく補助事業によって道路の整備や、平成27年3月には、林内に休憩所“ふれあいの小屋”が完成して作業の効率も良くなった。

間伐作業は、毎月第3日曜日を定例作業日にして、年間12回。ただし、町内会の作業を優先して変更する月もある。伐採竹は纏めて豊田市の焼却場へ運んで燃やしてもらっている。最近では、伐採竹の利用を考える会社(豊田バンブー株式会社)が聞きつけて来られ、機械を運んできて一部竹チップにされている。粗いチップやパウダー状にして、肥料や公園等の遊歩道に敷き詰めるなどさまざまな試験を始められている。

ボランティア学生さんの協力もある。間伐は会員で、ボランティアの方には搬出をいただいている。

設立時の会員18人。2人増え、1人引退され、現在は19人で内訳は50代1人、60代8人、70代10人。加えて、女性部(会員のつれあい)が14人となっている。

キャッチフレーズ :

ただひたすら私たちは竹をきる

会のモットー(何を大切にしているか) : 参加することも、作業も無理をしない。慌てず、ゆっくりと。

作業に参加するときも体調に合わせて、無理強いはいしない。

曲がった竹は切ると、倒れる時に縦に裂けやすいし、長いので倒れた先に人がいないことを確認するなど、怪我のないように気を付けている。お陰でH23年から今まで怪我をした人が一人もいなかった。

設立から現在に至るまで変化したこと:

①みんながやる気満々になってきた気配を感じる。家でブラブラしては体に良くないから会に入れて欲しいという人もでてきた。会員の連れ合いの14人の女性が加わった影響も大きいと思う。

②14人の女性で女性部を作り、筍が生育する5、6月に採取して、皮を剥いて、小渡の商店街に出荷している。瓶詰めにし、“夢たけのこ”の商品名で販売している。ただ、有間竹林愛護会としては皮をむいた生の筍を出荷するまでを担当している。

③女性部の会員で“たけのこ屋”というグループをつくって、販売の許可をとって筍ごはんの弁当をイベント会場で販売をするようになった。

④H24年からは、ただ竹を伐採し5、6月に筍を出荷するだけでは能がないのではと考え、集落全員参加で“初物の会”を催すようになった。整備した竹林のなかで、採れたての筍ご飯を炊いて、味わい楽しんでいる。

連携している団体・専門家・自治体など:

豊田矢作川研究所、おいでん・さんそんセンター、豊田バンブー(株)、矢作川愛護の18団体(情報交換をしている)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など):

現在活動中のすべての事柄が該当するように思いました(取材者)

現在直面している課題:

竹は直ぐ生えてきて、油断すると直ぐ繁る。タケノコの間に採取、伐採するのが効果的と考える。生育の期間は女性部が筍を担当している。

H26年、27年連続で椋山女学園大学の食品・栄養学専攻の学生や小渡こども園の園児、今年是小渡小学校の1、2、3年生も筍採取体験に来てくれた。採った筍を土産に持って帰ってもらっているが、筍を活用した新たなレシピの研究開発があるとよいと思う。

今後やってみたいこと:

- ①安らぎと憩いの場を求めて地域の外からの人にも来てもらいたい(そんな場を作りたい)。
- ②遊歩道が完成したら、竹林内の案内板を設置したい。
- ③竹林の下流の川岸に、土地の人が昔から水神さんと呼んでいる大きな石があるので祠を建てたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か:

広報の仕方やアイデアがあれば頂きたい。

チームオリジナルの質問:

<質問内容>竹林の整備地の所有者と地目はどうなっているのか。

全て民有地で畑。

整備計画地55,000m²が有間竹林愛護会に委託されている。

その他、伝えたいこと:

整備を急ごうとすると積極的にボランティアの募集を願うことになるが、それも“急がずゆっくり”、と思っている。



竹林ふれあいの小屋 (H27年3月完成)



原田 茂男代表



整備した竹林

こども園児がたけのこ採り体験

6月4日(水)、小渡こども園児がたけのこ採り体験に訪れました。11名の園児と先生・保護者のみなさんが竹林を見学しながらたけのこの採取を楽しみました。竹林愛護会の会員に採り方を教わり、たくさんのたけのこを持ち帰って帰りました。



もうすぐ、こっちはだよ。たけのこ。



集落全員参加で初物の会(筍ごはん)

“有間竹林愛護会だより”より

あすけ聞き書き隊

調査団体名	: あすけ聞き書き隊	団体代表者名	: 河合友理
設立年	: 2010年	対応してくれた人の名前	: 河合友理
団体URL	: http://asukekikigaki.boon-log.com/	調査員	: 今村豊、洲崎燈子
活動拠点	: 豊田市足助地区	レポート作成者	: 洲崎燈子
取材日	: 2015年 12月18日		

活動内容

豊田市足助地区に住む70代以上のお年寄りから、主に仕事について話をうかがい(最低2回)、記録に残す。1年間かけて取材と書き起こし、編集を行う。発起人は旧足助町役場に勤め、足助の地域振興に関わってきた、去年までの代表者の井上美知代さん。足助地区に受け継がれてきた山里の伝統や文化を、次世代に語り継ぐのが自分たちの使命だと感じたことがきっかけだった。

2010年に開始し、毎年1冊発行して、現在6冊目を作成中。自分は初回から参加している。スタッフは、「まだ話を聞きたい人がいっぱいいるので続けたい」と言っている。毎年、なるべく足助地区のさまざまな場所に住むお年寄りからお話を聞くようにしている。

取材者は愛知県内各地から集まっていて、他にも初回からの参加者がいる。年代は30～50代位だが、以前中学生が親と一緒に参加したこともある。

キャッチフレーズ

昔のくらしから今のくらしを見直す

会のモットー(何を大切にしているか)

話し手の言葉を大事にする。本人の話した言葉のみを使い、本人の口調で文章を作る。当たり前の生活の大切さを伝える。

設立から現在に至るまで変化したこと

第1集と第2集は豊田市の「地域予算提案事業(取材者注:効果的に地域課題を解決するため、地域住民の提案を市の予算案に反映させ、地域の課題解決を進める事業)」を使って発行した。第3集以降は同じく市の「わくわく事業(取材者注:地域資源を活用し、地域の課題解決や活性化に取り組む団体を支援する地域活動支援制度)」を用いて配布分(200部)の冊子を印刷し、他にお金を出し合って販売分(200部)を印刷している。わくわく事業の助成はいつまで受けられるかわからないので、ゆくゆくは自前で発行できるようにしたい。10集は発行したい。

第3集を発行したときに交流館で発表会をした。第4集以降はより地域の人とのつながりを意識して、足助病院で発表会をしている。来年2月には朗読会も計画している。お年寄りには字が小さいようなので(フォントサイズ10)、朗読を聞いて聞き書きに触れてもらうのも一つのやり方と考えた。入院している人にもふらっと聞きに来てほしい。いずれは患者さんにも話を聞きたい。

連携している団体・専門家・自治体など

NPO法人共存の森ネットワーク(聞き書きの指導)、豊田市役所足助支所、三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

昔の価値観を教わることで、今の地域をよくするきっかけになる。たとえば、昔は今と全く異なり、山との関わりが重要だったと知ることが、「間伐を進めて山に入りやすくしよう」と思うきっかけになる。また、地域の長所と短所が分かる。足助出身の自分としては、ターンの人たちの活躍は嬉しいが、地元の若い人ももっとこういうことを知り、地域おこしに関わってほしい。

現在直面している課題

毎年続けることが課題。新たな聞き手の参加を増やすこと。

今後やってみたいこと

もっと若い人に読んでほしいし、聞き書きに参加してほしい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

足助地区に一つずつある中学と高校で呼びかけをして、取材者をリクルートするといいかもしれない。民俗学を専攻する大学生とつながりを作れるとなおいい。主婦にも声かけして、編集などの手伝いに関わってもらえるといい。主婦が昔の家事のことを聞くのも面白いと思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容>聞き書きのコツを教えてください。

<答え>話を聞くときは自分が堅くならないように気を付ける。想像していたのと違う話が出てくることもあるので、話しながらインタビューされたいことを探る。予備知識のない若い人が話を聞いた方が詳しく説明してくれることがあるので、時には知らないふりをすることも必要。また、「大変だった」「印象がひどかった」と良くないイメージの言葉が続くこともあるが、インタビューを重ねて出た「それでもいい体験だった」という本人の言葉を生かすような編集次第で、読者が受ける印象が随分と変わる。戦争体験を沢山話される人が多いが、聞きたいのは仕事の話なので、バランスを考えて構成する。世間話になってしまうと文章にできないので注意する。実際に話を聞くと、冊子には載せられないことが聞けるのが面白い。

チームオリジナルの質問

<質問内容>聞き書きを続けていてよかったと思ったことを教えてください。

<答え>お年寄りが家族に話せないことを話してくれることがある。話を聞かれるのが気晴らしにもなるようだ。「また来てね」と取材者と仲良くなったり、引きこもりがちだったおじいさんが外に出るようになったりしたこともある。

できあがった冊子を渡すと喜んでくれる。10冊ほしいという人もいる。

話を聞いているのと同じ世代の方が「懐かしい」と言って、毎年発行を楽しみにしてくれている。

毎年続けることで地域に普及し、応援してくれる人が増えた。

たとえば今、鍛冶屋さんに話を聞いている方がいる。一般的に刀鍛冶は有名で、ネットでも多くの情報が出てくるが、山や畑の仕事に使う道具の鍛冶についての情報は全くない。あるとしたら研究者の論文くらい。こういう情報が残せるのは貴重だと指導者の方に言われ、聞き書きでないと拾えない歴史があると再確認した。

その他、伝えたいこと

聞き書きを通じて分かった足助という地域の個性。足助に住んでいる人は香嵐溪を誇りに思っていると思う。町で商売をしている人はいろいろな仕事に次々チャレンジし、山間部に住む人は丁稚に出たりしてこつこつ頑張っているという印象を受ける。また、小さな集落の結束力の強さを感じることもある。足助の人は、美しい風景へのこだわりがある。山間部の人も、「草刈りしてきれいにしておかないといけない」という意識がある。自分たちも年を取ったら、「きれいな風景を維持できないとみっともない」と言えるようになりたい。今の荒れた山しか見ていない子たちにこういう思いを持ってもらうのは難しい。



河合さんの本業は和紙を漉くお仕事です



聞き書き講座(2013年7月、足助交流館にて)



第3集以降の表紙は河合さんが手がけています

平成26年度 足助地区わくわく事業



☆あすけ聞きフェス開催主旨&活動報告☆

☆足助の聞き書き 第5集 完成報告&作品紹介☆

足助のお年寄りの生き様を話し言葉で綴った「足助の聞き書き」。
吉野奈保子氏(共存の森ネットワーク事務局長)をコーディネーターに迎え、
話し手と聞き手とのインタビューを交えて完成した第5集を紹介。

*駐車場は足助病院駐車場をご利用ください。



お問い合わせ

090-8732-6308(事務局 高木まで)

あすけ聞き書き隊で検索!

ブログ: <http://asukekikigaki.boon-log.com/>

協力: JA愛知厚生連 足助病院

三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会

聞き書きフェスのチラシ(2015年3月、足助病院にて)

山里センチメンツ

調査団体名 : 山里センチメンツ
 設立年 : 2013年(1月)
 団体URL : <http://yamazatosentiments.booo-log.com/>
 活動拠点 : 444-2802 豊田市田津原町惣作9番地の1
 取材日 : 2015年12月15日

団体代表者名 : 安藤 順 (中心スタッフ5名)
 (プロジェクト毎にスタッフが入れ替わります)
 対応してくれた人の名前 : 安藤 順
 調査員 : 洲崎燈子・今村豊
 レポート作成者 : 今村豊

活動内容

地域住民が余分な精神的ストレスを受けることなく生活でき、健やかに生きられるように、新しい概念である「モラルハラスメント」を地域に紹介している。設立時の平成25年から現在に至るまで「モラルハラスメント」についての学習会・講演会等を、豊田市の山間部で専門家を招いて5回開催した。グループ名で使っている「センチメンツ」という言葉は、人々が持つ気分、気持ち、心情、たたまい、雰囲気、共感のことで、里山に住む人々の心や空間を健やかなものにしていこう、気持ちを言葉で伝えて心を置き去りにしない、という「山里の住民が持つべき健やかな心」を表している。

※モラルハラスメントとは

身体を傷つけずに、言葉や態度で心を傷つける嫌がらせやいじめのこと。目に見えず証拠に残りにくい。

キャッチフレーズ

「気持ちを言葉で伝えて 田舎を居心地の良い所にしていこう」

会のモットー(何を大切にしているか)

- ①モラルハラスメントをなくし田舎を住みやすくすること
- ②住みやすい田舎をつくる人を育成すること、
- ③山村における「子どもの人権」について認識を高めること
- ④子どもの自主性・多様性を育み尊重すること

設立から現在に至るまで変化したこと

設立当初(2013年1月)講演会開催費用等、資金面で悩んでいたところ、豊田市旭支所長さんが「旭地区わくわく事業活動助成金制度」を教えてくれ、今後の活動資金の調達について目途が立った。その後、「モラルハラスメント」についての学習会・講演会を重ねることで、豊田市旭地区の「モラルハラスメント」に対する認識度を高めることができた。こうした活動を通じて「山里センチメンツ」が理想としている、地域を超えた様々な方々がテーマを共有しながら連携して活動を展開していく「テーマ・コミュニティづくり」に結びついた。平成27年以降は大人が子どもを抑圧するのを防ぐこと、子どもが自殺しなくて済むようにすることに力のほとんどを注ぐ方針としている。

連携している団体・専門家・自治体など

愛知県厚生農業協同組合連合会足助病院、三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会、おいでん・さんそんセンター、NPO法人 都市と農山村交流スローライフセンター、とよたプレーパークの会、野外保育とよた森のたまご、アルプスこども会(長野県駒ヶ根市)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山村に住んでいる大人や子供、山村に来たばかりの方、これから山村に来られる方々が、自分が暮らす地域社会を、人間関係においてストレスがなく、健やかな気持ちで末永く暮らしていける居心地の良い山村で良かったと実感できるように、「モラルハラスメント」の学習会・講演会等を実施している。これらの取り組みによって、山村における「人間関係の改善」という最も基本的な住民のメンタルな側面から、山村の再生と担い手づくりに貢献している。

現在直面している課題

子どものメンタル的な被害者を失くすため、教育関係者と連携した取り組みや、「教育の改革」等をテーマに活動を展開したいが、教育関係者の組織の壁は厚くなかなか入り込めないのが現実である。今後、効果的な取り組み方法について勉強を進めていきたい。また、こうした「モラルハラスメント」の概念を、さらにより多くの山村に定着させていくためにはどんな方法が良いか、そのひとつの方法として、自著による「取り組み成果の冊子化及び図書化」を検討している。

今後やってみたいこと

歪んだ子ども観を持つ大人から子どもへの心的虐待を予防するためのミニシンポジウム「あたらしい子ども観を学ぶ」を平成28年末に開催します。またその半年前に「みんなの学校」という映画の自主上映会を開催します。また、次の施設を訪ねます。フリースクール自分を生きる学校Mii(多治見市)、みんなのたまり場ちゃどかん(多治見市)、森のようちえん 自然育見 森のわらべ多治見園(多治見市)、森のようちえん てんとうむし(みよし市)、野外保育とよた 森のたまご(豊田市)、とよたプレーパーク(豊田市)、とよた子どもの権利相談室(豊田市)、子どもオンブズパーソン(兵庫県)

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

先にあげたグループと連携し合う他、自分たちのメンバー以外に毎回取り組むテーマごとに新メンバーの方々に加わってもらっている。従って、情報や人脈は学習会・講演会・シンポジウムを開催する度に、入手・拡大している。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

山村に「モラルハラスメント」の概念を定着させることに取り組む、そのきっかけとはどんなものだったのですか。

<答え>

- ①身近な知人に「いじめ」に会った方がいて、どうにかしなければいけないと感じたこと
- ②山村部においても「モラルハラスメント」の実態があることを強く実感し、いたたまれない気持ちになったこと
- ③そうした実態がありながらも、山村に「モラルハラスメント」の概念がなく、常態化していても気づきがないこと
- ④「モラルハラスメント」をなくすには、その芽とも言える子ども時代の「いじめ」を失くす必要があること
- ⑤そのためには「里山の自然環境」を活用した活動を通して、子どもの自主性・多様性を高めていくことが理想的である事例を知り、当地区でも実践したいと感じたこと
- ⑥本当に住みやすい山村をつくるためには、山村に関わるすべての人が「モラルハラスメント」の問題を絶対に避けては通れないこと

その他、伝えたいこと

山村に住む多くの方が人間関係や地域社会の中で「いじめられ感・疎外感」を感じていながら、なかなかその感情を言い出せなくて悩まれている。それは、健全な心の状態とは言えず、このことに地域社会は気づいて、対応しなければならない。こうした「モラルハラスメント」の概念を山村に普及し、また、その実態を気づかせて、山村に住む誰もが自分の気持ちを言葉で伝えられるような地域社会に変え、皆で田舎を居心地の良い所にしていきましょう。

写真



取材風景



テーマ・コミュニティ・ミーティング【いじめとハラスメントを語り考えるミーティング 2015 足助】
(平成27年10月30日に足助病院南棟講義室で開催)

今後、豊田市総合教育会議、豊田市教育委員会、定例会議、豊田市議会、豊田市地域会議(旭、足助など旧町村)を定期的に傍聴していく。

しもやま再来るプロジェクト

調査団体名 : しもやま再来る(サイクル)プロジェクト
 設立年 : 2012年(6月)
 団体URL : <https://www.facebook.com/shimokuru>
 活動拠点 : 手づくり工房山遊里
 取材日 : 2015年12月05日

団体代表者名 : 木下貴晴
 対応してくれた人の名前 : 木下貴晴・川合寿佳
 調査員 : 大森正昭・高橋伸夫
 レポート作成者 : 高橋伸夫

活動内容

下山地区の活性化を目的として主に土日曜日、下山地区在住の主たるメンバー7名で下山地区をサイクリストのパラダイスとすることを目的に活動している。間伐材を利用した自転車ラック(スポーツ自転車の駐輪装置)を地区内の店舗等に設置することを考え、20台作製して店舗に設置してもらった。アンケートで得られたサイクリストやトライアスリートの需要「ごく軽い食事」や「短時間の休憩」等を提供するための「ちよい食べ企画」(おしるこ、おにぎりなどの販売、しもやま茶の試飲提供、冬場は薪ストーブでの暖提供等)を考えて実施中。他に下山地区の周辺で行われている自転車関係の行事へのお手伝い等も実施している。

キャッチフレーズ

「走りながら考えよう まずは行動」
 「エコフルタウン豊田市を車と自転車の町に！」

会のモットー(何を大切にしているか)

自転車乗りに優しい地域づくりで下山へ再び来ていただくことを目指す。(これが会の名前の由来)

設立から現在に至るまで変化したこと

設立当初(2012年6月)は資金面で豊田市「わくわく事業」の補助金を考えていたが、条件が合わず断念。その後香恋の里しもやま観光協会と豊田市法人会の補助金の目処が付き2014年に申請、2015年に豊田森林組合に発注して自転車ラック20台を作製。地域の店舗には実費の半額程度で購入していただき、希望のあった店舗の前に設置していただいた。2015年4月18日他で当プロジェクトの記事が中日新聞に掲載されて、問い合わせなど多くの反響があった。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田森林組合・香恋の里しもやま観光協会・豊田市法人会・NPO法人チャリンコ活用推進研究会・(株)トライアスロンステーション

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

間伐材を使用した自転車ラックづくり・自転車ラックの設置や「ちよい食べ企画」などの受け入れ態勢を作って下山地区へサイクリストの誘致など、全て根底には地域の活性化・地域興しがある。(他に同地区で実施しているわくわく事業では、竹藪の伐採など景観整備やベンチの設置を実施している)

現在直面している課題

最大の問題は活動資金の調達。まだ本格的な事業化まで達していない。
 その他には自転車文化の振興に対する行政等の関心不足・自転車のルールやマナー違反によるトラブルの発生。

今後やってみたいこと

自転車ラックの改良、自転車ラックを豊田市周辺中山間地へ普及させる、充実したサイクリングマップの作成、自転車マナー等の啓発（プロ等を講師に招いて正しい乗り方指導の講習会実施など）、自転車道路の整備および自転車用標識や案内板等を充実するため関係機関への働き掛け。

以上の他にも、地域の気象や道路状況などをリアルタイムの情報としてサイクリストへの提供ができないか、一般的な自転車ラックに使用されている樹脂製部品を木製で作製できないか、トヨタ自動車の新テストコースで自転車イベント（ジョギングやサイクリングイベント等）を実施させてもらえないか、三河湖の周辺に来訪者が楽しめるアート作品（佐久島の「おひるねハウス」のようなもの）の設置ができないかなど、やりたいことはたくさんある。「自転車といえば下山が有名だよね」となることを目指している。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

矢作川流域圏懇談会も情報・人脈を得る上で力になりそう？

チームオリジナルの質問

<質問内容>

山遊里の対岸上流部分が整備されているが、誰が行っているのか？

<答え>

「しもやま再来プロジェクト」メンバーも参加している地元団体が豊田市「わくわく事業」の補助金を得て行っている別事業で、地域の景観整備を行っている。伐採した竹をチップにして地面に敷き（舗装効果と雑草防止効果がある）、テーブルやベンチを設置している。

その他、伝えたいこと

「エコフルタウン豊田市を車と自転車の町に！」を目標に
行政（豊田市エコフルタウン）にバックアップしてもらえるような存在になりたい。

写真



取材風景



自転車ラック



ちよい食べ企画

コレカラ商店・コレカラ農園・コレカラご飯

調査団体名	コレカラ商店・コレカラ農園・コレカラご飯	団体代表者名	水澤孝司
設立年	2013年	対応してくれた人の名前	水澤孝司
団体URL	http://stillwate2.wix.com/korekara		
活動拠点	豊田市大阪町北ノ入47-1(コレカラ商店)	調査員	丹羽健司、浜口美穂
取材日	2015年 12月 21 日	レポート作成者	浜口美穂

活動内容

●これまでの経緯

- ・神奈川県川崎市出身。
- ・自分のお店の開店資金をためるため、西表島で調理師として住み込みで1年ほど働く。
- ・青森県弘前市で5年ほどアジア料理の定食屋を営む。同時に六ヶ所村核廃棄物再処理場や原発への問題提起の活動も行う。
- ・かねてから空き家バンクを通じて情報を入手していたが、東日本大震災をきっかけに2011年4月、妻と1歳半の子どもと一緒に豊田市小原地区に移住。
- ・様々な活動があったにも関わらず、原発事故が起き、住むところをなくした人もいた現実に無力感を覚え、その反動で移住後は某大手の会社で調理師として働く。・・・が、2時間で何千人もの食事を作り、「気持ちが入っていない料理だから一口食べて合わない」とすぐポイッと捨てられてしまう」という状況の中で自問自答。「本当にやりたいことは、自分で育てたもので料理を作って提供すること」と再確認し、3カ月で会社を辞める。
- ・2012年4月頃から1年間、豊田市栄生町の「みどりの里」で農業(自然栽培)研修を受ける。
- ・2013年に車の移動販売の許可を取り、各地のマルシェなどでお弁当販売をするようになる。小原の食材を使った菜食弁当。
- ・同時に元は桑畑だった畑を借りて無肥料、無農薬、固定種の種で野菜栽培を始める。
- ・同じく2013年に友人2人とイベントもできるスペースを借り、「419製作所」と名付ける。その一角の店舗で「自分で作る」ことを応援する商品(基本調味料、ビールキット、オーガニックコーヒーの生豆、各種スパイス、製麺機、湯たんぽなど)を扱う「コレカラ商店」を開業。
- ・2014年には、陸稲作り、畑に残っていた桑の木を活用して桑茶パウダー作りも行う。

●2015年の活動

- ・コレカラ農園・・・3年目で1反に増やしたが、夏に時間をかけられなかったら草に負け、イノシシに入られて、初心に戻る機会を得た。桑茶パウダーは小原地区に本社があるあいのう流通センターが半分ほどを買い取り、残りは手売りで完売。
- ・コレカラご飯・・・月に4つのマルシェ(豊田・green mamanの朝市、豊田・ストリート&パークマーケット、名古屋・東別院手づくり市、あま市・甚目寺観音手づくり市)で菜食弁当の販売をする他、オードブル・ケータリングの注文を受けている。
- ・コレカラ商店・・・現在は、419製作所でイベントをする時のみ開店。「自分で作る」「買い続けなくていいもの」を販売。

キャッチフレーズ

懐かしくて新しいコレカラの暮らし

会のモットー(何を大切にしているか)

●自分で作る暮らし

商店を始める時に、ビーフリーマーケットをやろうと思った。日本語に当てはめると何だろうと考えて「コレカラ」にした。「懐かしくて新しい」というのは、「自分で作る」暮らし。

与えられる(買う)ものだと思い込んでいるものが、自分で作れることを知ると変わってくる。喜びも湧いてくる。個が変わると全てが変わると思う。

●目指すは、「農」「仕事＝料理」「暮らし＝家のこと」の3つのバランスがとれること。

設立から現在に至るまで変化したこと

コレカラご飯・・・最初は菜食メインの料理だったが、M-easyの戸田さんに「自分がやりたいことより、人がやってもらいたいことをやった方がずっと続くよ」と言われ、希望に応じて菜食以外の料理も作るようになったら、オーダブルの注文が増えてきた。こだわりを捨てたら広がった。マルシェでは菜食弁当を販売しているが、それは「みんなが食べられる(食べられない人がいない)」から。欲しい人に欲しいものを作ってあげられるのがいい。

連携している団体・専門家・自治体など

大工集やまびこ、green mamanなどマルシェでつながった人・団体、M-easy、山本薫久氏、おいでん・さんそんセンター、他多数

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・419製作所は、異業種の人たちが集まって何かを生み出せたらと思って借りたスペース。現在は音楽的なイベントや、水澤さんの妻をはじめとする女性グループが中心となって不定期で朝市を開催。これからここでどうやって利益を生んで活かしていくか考えている。
- ・地元の人から借りている畑は、元々桑畑でその後リンゴ畑になった後、セイタカアワダチソウがはびこっていたところ。それを開墾した。桑の木があったので活かしたいと思い桑茶パウダーを作った。今年は300袋？弱だったが、目標は1000～2000袋？。
- ・山の間伐材(ヒノキ)でなめこを栽培。
- ・稲作り・・・今年、妻の女友達も含め3人で田んぼを借りた。
- ・移住から4年経ち、今年は地域の組長をやっている。

現在直面している課題

まだまだ駆け出しなので、農と仕事と暮らしのバランスが取れないこと。ほんとは暮らしに必要な分だけ仕事(料理)をして、余分な仕事は断り、あとは農と家のことをやりたいが、まだ始めて2～3年なのでお客さんがいなくなる不安感から注文はすべて受けている。そうすると、2015年のように農に時間をかけられなくなる。

今後やってみたいこと

- ・ワンデーシェフを2015年は名古屋でやったが、もっと近いところで定期的にやりたい。
- ・419製作所の活用。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

地域でつながりづくり。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞青森でやっていた反原発運動などは今はやっていない？

＜答え＞

今は暮らしに落とし込めていて、依存しすぎない生活を心掛けている。井戸のポンプをソーラー発電で動かしたり、温水器、お風呂も薪ボイラー。「お風呂ってこんなに気持ちいいんだと思った」。このような暮らし方はわくわくする。東日本大震災の時、うちにはだるまストーブも薪ストーブもあって困らなかった。昔の人が使っていたものはすごいと思う。

その他、伝えたいこと

●都会と田舎

田舎には値段が付いていないものがたくさんある。自分が生まれ育った都会は、全部に値段が付いていた感じがする。バスや電車を待つ時も座る場所がなく、お金を払って店に入らないと座るところもない。田舎なら切り株にだって座れる。人が見向きもしないものがたくさんある。そこが楽しい。

●女性と子ども

子どもがいるから、地元の人に「こいつは何やっているか分からないけど、ちゃんとやっているんだろう」と思ってもらえる。信用される。

女性は暮らしの中で見栄も建前もなく、当たり前のことを当たり前にやっていてすごいと思う。女性は田舎暮らしのキーポイント。

●助け合う暮らし

419製作所は3人で借りているが、それぞれが自立して1となってはじめて、集まった時に3以上のすごいものが生み出せるのではないかな。一人前になっていないものが集まっても何も生み出せない。それぞれが自立することがまずは大事。その上で大変なことがあれば助け合っていきたい。

小さな助け合えるコミュニティがいくつもあって、それが大きくつながるのが理想。広くなるとイベントになって暮らしではなくなる。

写真



コレカラ商店にて、水澤さん



東別院てづくり朝市(名古屋市)にて
コレカラ弁当を出店



桑茶パッケージ

first-hand

調査団体名 : first-hand 団体代表者名 : 松島周平
 設立年 : 2006年 対応してくれた人の名前 : 松島周平、松島知美
 団体URL : <http://first-hand.jp/> 調査員 : 丹羽健司・浜口美穂・吉橋久美子
 活動拠点 : 豊田市御所貝津町尺丈4-5(カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」は豊田市稲武町タヒラ8-1)
 取材日 : 2015年12月18日 レポート作成者 : 吉橋久美子

活動内容

1. 国産の無垢材を使った家具や暮らしの道具の制作。
2. カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」
3. 豊田市産の材にこだわり、木の伐採から流通までを手掛ける家具ブランド「hitotoki」
 (first-hand単独ではなく、「人と木をつなげるプロジェクト」として、8名のメンバーで実施)

コンセプト

やさしさと家族

会のモットー(何を大切にしているか)

「やさしい生活」。
 家具工房やカフェ、暮らしの道具を扱うショップを通して、自分たちの考える持続可能なライフスタイルを発信すること。
 社会の最小単位である家族を大切にしたい。日々の営みの中で、“生きること”に不可欠な食や住まいについて、無理なく楽しみながら出来ることを提案していきたい。

設立から現在に至るまで変化したこと

- 2006年 周平さんが「first-hand」を立ち上げる。
 2008年 結婚して知美さんが加わり、夫婦二人の家具工房となる。
 2010年 稲武に引っ越し。
 2015年 仲間と家具ブランド「hitotoki」を立ち上げ、木を伐るところから流通までを扱うプロジェクトを始動。
 2015年 カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」をオープン。5年後ぐらいと思っていたが早く実現した。

連携している団体・専門家・自治体など

カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」は一般財団法人古橋会の協力を得てオープンした。
 hitotokiは建築士や製材業者らの仲間と進めている。hitotokiの活動には豊田市森林課が協力を申し出てくれている。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

①針葉樹の利用促進

2008年から安心して使えるものをお届けしたいと思い、家具製作に使用する木材は”国産無垢材“に限定した。
 2010年稲武に移住を機に、身近な木(スギやヒノキ)の利用を試みている。当初は材料調達の面で難しさもあった。

②カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」

地元の木材や食材など地域資源を利用し、地域内外へ発信することで、地域がより活性し、山が良くなっていけば、という思いがあった。店の開業にあたっては、古橋会に力強い賛同と協力を得て、内装には地元の山の木を使うことが出来た。

③「人と木をつなげるプロジェクト」の活動

2015年、豊田市の森を知り、木に親しむ、そして流通をデザインする「人と木をつなげるプロジェクト」を仲間と立ち上げた。「hitotoki」という家具ブランドを立ち上げ、第1号となる杉のスツールを制作。2015年東京ビックサイトの「国際家具見本市」内での企画展にデザイナーとして選ばれ出展。会の活動は、同年「ウッドデザイン賞」を受賞した。

現在直面している課題

家具ブランド「hitotoki」は、豊田市内で育った木を伐り使っているが、将来的に製品を多く流通させるためには、分業が必要であると思う。豊田市内内の業者だけでは難しい面も出てくる可能性もある。また、販売は「ヒトキ-人と木-」を中心に始めるが、広く流通させるためには、販売店の開拓なども必要であると思う。

今後やってみたいこと

①針葉樹を使った製品作り

針葉樹を使った家具作りは始まったばかりだ。今後針葉樹の美しさや良さを国内に限らず、海外も視野に入れて商品展開をしていきたい。

②「hitotoki」の家作り

「人と木をつなげるプロジェクト」では、林業従事者、建築士、デザイナー、家具職人など様々な職種の人が所属している。豊田の木材を使って、“顔の見える”新しい家づくりの提案をしてみたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

そういったことを実現する為の、積極的にリサーチなどはしたりしない。
いつ実現するかわからないが、その時期が来たらできる、というスタンス。
すべてにおいて、無理せず流れの中でやっている。
それが僕らに本当に必要になったときに情報や人脈などを得られると考えている。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

豊田産とおっしゃっておられるが、「豊田」は行政区切りでしかないですよね。その辺はどう捉えていますか？

<答え>

「豊田発」で、材料としては「矢作川流域で」というイメージでやっていくというのがいいかもしれない。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

「hitotoki」で開発したスツールはどんなものですか？

<答え>

杉は“軽さ”も特徴の一つだが、杢目が大変美しく、他の木にはないと思った。そこで今回は、杉の杢目を活かしたデザインとした。木材の手配については、プロジェクトメンバーのおかげで思うものが手に入った。自動車の町を思わせるような金属フレームを入れたもの、板立てのもの、脚に杢組みを利用したものと3種類を作り、この中から1種類を製品化する予定だ。杉は広葉樹に比べて加工が難しい面もあり、制作には苦労した所もあった。

その他、伝えたいこと

2011年3月の東日本大震災があって、何のためにものづくりをしているんだろう...と考えた。
自分たちのものづくりが何か世の中で役立つといいなというのがあり、山の木を使うということで山を良くする“一役を担う”ことをしたいと思った。
息子が、「お父さんがやっていることが山を良くしていくことに繋がってる」と思ってくれたら嬉しい。そうなったら、子どもたちもいろんな希望を持って、生きてることにワクワクしてくれるのでは。
「お父さんみたいになりたい」と思えるような社会になっていったらいいと思う。希望ですけどね。(周平さん)



カフェ+ショップ「ヒトトキ-人と木-」



「hitotoki」で制作したスツールを6つならべたところ



取材風景

額田木の駅プロジェクト

調査団体名 : 額田木の駅プロジェクト
 設立年 : 2015(平成27)年
 団体URL :
 活動拠点 : 岡崎市千万町町
 取材日 : 2015年12月3日

団体代表者名 : 鈴木啓允
 対応してくれた人の名前 : 唐澤晋平(実行委員会事務局長)
 調査員 : 清水雅子、井上崇也
 レポート作成者 : 井上崇也

活動内容

■沿革

平成26年10月 準備会設立
 平成27年2月 実行委員会発足
 平成27年5月 開駅式開催

■仕組み

- ・山から切り出された木を1トンあたり6,000円相当の地域通貨で買い取る。
- ・買い取った木は3,000円/tで岡崎市内のチップ業者へ販売し、差額は岡崎市の補助金より補填する(今年度は国の地方創生の交付金を使用)。
- ・出荷量は自己検尺で伝票に記入(末口×末口×長さ×0.75でトン数に変換)する。
- ・毎月1回、実行委員会を開き、出荷状況や地域通貨の利用状況についての報告や運用方法について協議する。
- ・換金は月末頃に事務局が登録店舗を回る。
- ・事務局手数料として出荷者から5%を徴収(発券時に差し引く)する。

■平成27年12月1日現在

出荷登録者数 85名
 登録商店数 50店舗(額田地域及び周辺地域)

キャッチフレーズ

山も地域も元気に！

会のモットー(何を大切にしているか)

木の駅を通じて多くの人に山に関心をもってもらう。山を守る必要性を知ってもらう。

設立から現在に至るまで変化したこと

現在に至るまでといっても、5月に始まったばかり。ただ、当初考えていたより多く出荷されており、予算が足りなくなる可能性が高くなってきた。到底届かないと思っていた目標(年840トン)を超えそうな、額田地域の林業に対するポテンシャルの高さを実感でき、期待が高まっている。

連携している団体・専門家・自治体など

岡崎市林務課、額田林業クラブ、岡崎市ぬかた商工会、岡崎森林組合、森林ボランティア団体、近隣の木の駅

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

額田地域は現在も林家が多く、林業で成り立ってきた背景があり、こういった林業に関わる取組に対する反応が早い。木を切って出し、地域通貨を流通させる仕組みを作ることで、林や森に関わってきた人たちに、再びチェーンソーをもって山に入ってもらいきっかけづくりになればと思っている。実際に老夫婦がひと月で10トン近く出してくる例もある。

現在直面している課題

木の駅から出荷される材は製紙用チップとなっているが、補助金頼みの現状から抜け出すためにも少しでも付加価値の高い売り方を検討していかなければならない。

今後やってみたいこと

- ・地元の子供たちを対象に、子どもの木の駅ということで、間伐、出荷、その対価で買い物まで行う環境教育をしたい。
- ・薪などで木の駅材を地域内で利用する取組み。
- ・手入れのできていない森林と、山を持っていない木の駅の出荷登録者とのマッチング。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・学校関係者、間伐させてもらえる山に関する情報
- ・薪ストーブユーザーや薪ボイラーを使ってくれそうな施設

チームオリジナルの質問

<質問内容>唐澤さんが木の駅に関わろうと思ったきっかけは？

<答え>宮城県で環境教育を行うNPOに所属し、額田のような中山間地域で活動していた。そうした活動の中で感じたのが、環境問題は長期的なものだが地域の問題は5年10年の期間でどうにかしなければならないものであるということだ。そうした現状をどうにかしなければならない気持ちを強く持った。昨年額田へ移住したところ、ちょうど額田木の駅プロジェクトの準備会が始まり、良いチャンスと思い関わることを決めた。資本主義的な物差しでみれば田舎はいらないのかもしれないが、自分はそれだけでは測れない魅力が田舎にはあると思っている。

チームオリジナルの質問

<質問内容>宮城県からのJターン就職者という視点から見て額田という地域はどう映るか。

<答え>少子高齢化が進む自分たちの地域を本気で何とかしたいと思っている人がたくさんいると感じた。まだそれが形にはなっていないとも熱がたまっていけば、いつか火がつくのだろうと期待している。

その他、伝えたいこと

・額田は、もともと林業で成り立ってきた歴史があるので、今回のような木の駅プロジェクトに対する反応が早い。市の補助金の予算を840トン分つけていただいたが、当初はとても使い切れるほど木が出てくると思っていた。しかし、ふたを開けてみれば、予算が足りなくなることを心配するほど木が出てきた。そういった意味で、額田地域はポテンシャルが高いと言える。

・林業の衰退がそもそもの原因といえるが、木の駅プロジェクトだけではとても食べていけないので、木がどうしたら売れるかを考え、その仕組みを作ることができれば、山に興味を持つ若い世代は必ずいると思っている。山で生活していける、子どもを養っていけるような環境をつくるのが田舎を活性化させることにつながる。そのためにも木を切って、売れるというルールを作っていきたい。

・林業をしていくために長期的視点で考えると、材を出しやすいところは造林をしていき、利用を行うというサイクルを確立していくべきだが、今はとても材を出せない奥地にまでスギ・ヒノキを植えてしまった状態である。そういった奥地は、天然林に戻し、天然更新に任すべきである。山のグランドデザインをもって取り組んでいけると一番いい。

写真



土場にて説明(左が唐澤さん)



地域通貨「森の健康券」



実行委員会の様子

日近太鼓

調査団体名	日近太鼓	団体代表者名	吉口照波
設立年	1994(平成6)年	対応してくれた人の名前	吉口照波、吉口和江
団体URL			
活動拠点	日近の里(岡崎市桜形町地内)	調査員	近藤朗、井上崇也
取材日	2015年12月5日	レポート作成者	井上崇也

活動内容

■「日近太鼓」の名称について

地元の旧額田町桜形町はその昔、一帯が日近という地名であり、奥三河の土着有力勢力であった奥平氏が築城した「日近城址」に由来。演奏では、奥平氏が後の徳川家康の軍勢と戦った「日近合戦」を太鼓の弾き語りで表現している。

■歴史

平成6年に5組の夫婦と3人の主婦で「日近太鼓研究会」として発足、「早川流やぐら太鼓」の先生に指導を受けていた。当初は形埜地区の神社から太鼓を借用し練習を行っていたが、翌年から県の補助金とメンバーによる林業収益により太鼓を購入した。その年に感謝祭として第1回「日近の里太鼓フェスティバル」を開催した。また練習場の駐車場や野外ステージを地元企業や川で遊ぶ会の協力により設置した。十周年を迎えた際に日近太鼓研究会から「日近太鼓」として早川流から独立し、その後も様々なイベントに出演した。平成27年2月に二十周年記念公演を開催するに至る。発足からその記念公演まで延760回の公演を行った。

■現在

大人15人、子ども5人の計20人。小学生から70代までと幅広く、高校生や20代30代も活躍している。演目も日近合戦太鼓やかおれの清流といった基盤曲から人気ドラマやアニメのテーマ曲まで数多く叩いている。チーム内にも演者の年代ごとにグループを作り、独自に出演もしている。

キャッチフレーズ

日近の里は人情厚き現代の別天地

会のモットー(何を大切にしているか)

楽しみ続けること！

活動には経費が掛かるが、義務的なものと思いながらやるのではなく、カラオケのように楽しむための費用ととらえて維持管理しながら楽しもうという精神。

設立から現在に至るまで変化したこと

当初は本当に太鼓がやりたいという気持ちで始まった。しかし、様々なイベントに参加し、活動していくうちにそれが結果的に地域おこしにつながっていった。根本の大事な部分として自分たちが楽しむということは忘れてはならない。

連携している団体・専門家・自治体など

早川流、杉浦太鼓店始め地元太鼓団体、城西高校

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

清流や澄んだ空気を生み出す豊かな緑の山々のある桜形町を歴史ある「日近の里」として、多くのイベントでの公演により広く市内外にPRしている。

現在直面している課題

設立当初のメンバーが高齢になってきている。立ち上げた人の前に立って自分が引っ張っていくんだという人がほしい。

今後やってみたいこと

小学生に対して、太鼓を通じて日近の歴史を伝えていきたい。できれば、日近に来てもらって直接様子を見てもらえれば印象にも残るのではないかな。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

教育委員会、太鼓に興味がある学校の教頭先生や校長先生

チームオリジナルの質問

<質問内容>メンバーに小学生がいるが、そういった子はどのようにして参加してくるのか。

<答え>日近太鼓が出演したイベントで見て聴いて、自分もやりたいと言ってくることが多い。地元の子ばかりではなく、岡崎市街から来る子もいる。

その他、伝えたいこと

■取材者から

日近太鼓は2015年に20周年を迎え、市民太鼓団体の先駆けとして精力的に活動されてきました。その原動力の根底にあったのは、何よりも自分たちが楽しみたい、やりたいという気持ちでした。日近太鼓の活動が受動的なものであったら20年以上も長く続くことはなかったのではないのでしょうか。魅力を見出して前向きな気持ちで活動できたことに中山間地域再生の鍵があると感じた取材でした。

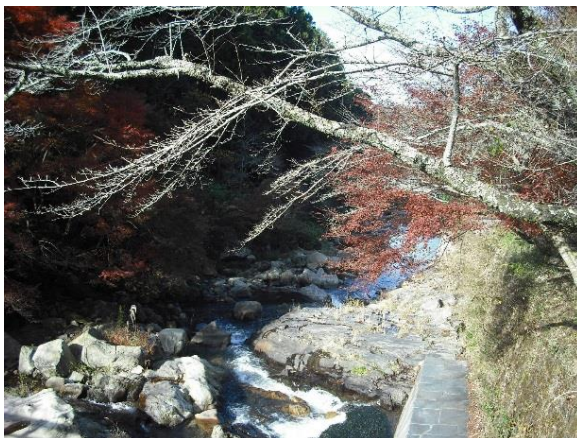
写真



元木材加工場を利用した練習場



吉口夫妻と取材者



日近の里の脇を流れるかおれ溪谷



平成28年1月1日 新年交礼会でのステージ
(岡崎市提供)

鳥川ホタル保存会

調査団体名	鳥川ホタル保存会	団体代表者名	松田直人
設立年	1994(平成6)年	対応してくれた人の名前	松田直人、片岡喜幸、今泉清、松下昭
団体URL	http://www.oklab.ed.jp/tokkawa/		
活動拠点	ホタル学校(旧鳥川小学校)	調査員	清水雅子、井上崇也
取材日	2015年12月3日	レポート作成者	清水雅子

活動内容

- ・ホタルの保護・育成活動(クリーン活動、森林整備など)
- ・名水百選である鳥川ホタルの里湧水群の維持管理
- ・水の源を巡る「ホタルの里の山歩き登山道」の整備
- ・ホタルまつり、山歩きイベントなど啓発イベントの開催
- ・炭焼きクラブなど、様々な活動が派生している

キャッチフレーズ

「(旧)鳥川小学校がある限り、コミュニティは永遠に不滅です!!!」

会のモットー(何を大切にしているか)

- ・地元の人たちの気持ちをくみ取って活動している。
- ・よそから来てくれた人を大切にする。
- ・自分たちのことは自分たちでやる!

設立から現在に至るまで変化したこと

- ・以前からホタルの保護活動をしていた鳥川小学校と共に、平成6年に鳥川ホタル保存会が発足。会には、鳥川地区の全57戸が参加している。
- ・その後、昔、使っていた山道を登山道として整備したり、ホタル祭りを行ったりと、活動が広がっている。
- ・鳥川小学校は閉校してしまったが、校舎は岡崎市の「ホタル学校」という施設になり、共に活動を行っている。
- ・やはり若い人は外に働きに出ていってしまっているが、町内の世帯数はあまり減っていないのが幸い。

連携している団体・専門家・自治体など

- ・平成22年3月に鳥川小学校が閉校したが、24年4月には校舎が岡崎市の「ホタル学校」となり、活動も岡崎市役所と連携して行っている。
- ・水守森(みまもり)支援隊、里山ハイキングの会等の方が、ボランティアで登山道整備や看板作り・設置をしてくれている。
- ・ホタル学校のホタルサポーターの方も、行事にお手伝いに来てくれる。
- ・今年のホタルまつりには、光ヶ丘女子高等学校合唱部の皆さんに来ていただいて歌を披露してもらった。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・登山道整備を行い、道案内の看板も木で作ったりして、登山客に山歩きを楽しんでもらう。
- ・間伐を進め、森林の手入れを行っている。
- ・炭焼きクラブで、森林資源の活用もはかっている。

現在直面している課題

- ・登山道の整備など人手が足りないことがある。
- ・林業が衰退した今は、山が荒れていて、川の水量も減ってきているし、大雨の時に土砂が流れて川が埋まってしまう。山に入って、山の手入れをしていかないといけない。
- ・活動の中心は60~70代の高齢者であるため、次世代への引継ぎを上手くしていかなければいけない。
(今の50代が定年になれば、やってくれると期待はしている)

今後やってみたいこと

- ・新たな山歩きコースを作りたい。
- ・山の手入れを進めていきたい。
- ・これからも楽しみながらやっていければいいと思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・山の手入れをするにしても、全体的に取り組んでいかないといけない。みんなで足並みを揃えて進んでいかないと。
- ・地籍調査を（行政に）行って欲しい。山の境界がわからなくなっているため、山の手入れも進みづらい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> どうして鳥川小学校の活動に、地域で参加することになったのか？

<答え>

- ・昔は時期になるとホタルがいたところで乱舞していたが、昭和30年代から40年代後半にかけてすっかり少なくなってしまった。また、魚も少なくなってしまった。水質汚染や農薬の影響もあったのだろう。
- ・鳥川小学校が昭和の時代からホタル保護活動を実施していたが、平成元年ごろから学芸会で発表するようになった。ホタルも少しずつ増えてきたので、小学校で子どもたちが頑張っているから地域あげて参加しよう、ということで、平成6年に会が結成された。
- ・鳥川小学校が地域の拠点となっていたので、自然とそういう流れになっていったと思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 地区の全戸が会員になっているとのことだが、活動に対して反対意見はないのか？

<答え> 意見は様々あるが、「反対」意見はない。会費も皆がちゃんと支払ってくれている。

チームオリジナルの質問

<質問内容> なぜ登山道の整備をすることになったのか？

<答え> ホタルの命は水であり、水は山から生まれるもの。だから、山歩きをとおして自然の大切さ、森林の大切さを感じてもらいたい。

その他、伝えたいこと

- ・鳥川地区の人は、自分たちのことは自分たちでやる、という気持ちが昔から強かった。洪水で川にかかる橋が流されると、皆で山の木を切って橋を架けたりしたものだ。
- ・山に囲まれた集落に学校が1つだけだったこともあったのか、学校行事のときは地域で参加し盛り上がった。今は学校がなくなってしまったが、「ホタル」の保護活動をとおして地域を連携させていきたい。
- ・平成20年に環境省の名水百選になった湧水など、鳥川の素晴らしい自然を多くの方々に触れて楽しんでもらいたい。
- ・市が閉校した小学校を「ホタル学校」として再スタートさせてくれた。大変素晴らしいことで、是非、多くの皆さん方に来て、学んでいただきたい。

取材者からひとこと

- ・こんなにコミュニティがしっかりした地域が、こんなに身近にあることを、取材するまで知りませんでした。
- ・以前に石徹白に取材に行ったときと同じような、とっても暖かい気持ちになりました。
- ・鳥川地区が素敵な地域であり続けていくこと、また、それを楽しみながら支えるヨソ者が集まることを、願うばかりです。

写真



取材に応じていただいた鳥川ホタル保存会の
皆さんと、取材者の2人



ホタルの餌となるカワニナの養殖



一つ一つ手作りされた登山道の案内板



登山道の入り口

岡森フォレストーズ

調査団体名	岡森フォレストーズ	団体代表者名	南條清二
設立年	2013年3月	対応してくれた人の名前	南條清二(塚本実並、眞木宏哉)
団体URL			
活動拠点	岡崎森林組合	調査員	丹羽健司
取材日	2016年 1月 12日	レポート作成者	丹羽健司

活動内容

2013年3月、岡崎森林組合のアイドル樋口奈央さんの寿退職送別会で「いっぺんやるか」と一度こっきりのメモリアルバンドを急きょ結成して「奈央ちゃんに捧げる歌」を演奏したのがきっかけ。反応がよかったのでついその気になってしまっただけで今でも続けている。

リーダーは南條清二さん(55歳)で作詞作曲、ボーカルとギター、ドラムは白井亮一さん、島田傭平さんがパーカッション、マンドリンは中村健太さん、ベースは甲田悠太さん、この4人は30代、紅一点はキーボードの塚本実並さん24歳、新人。全員現役または元岡崎森林組合職員で特殊伐採もこなすバリバリのきこりたち。リーダーは世界を回り仕事を変えながら現職で17年目。自宅もセルフビルドで額田の木で建ててしまった。メンバーの経歴も華々しく多彩で多才。元公務員や建築士、塚本さんは福祉から進路変更。昨年までのメンバー松ちゃんはタイに行ってしまった。山の自然や山仕事、山里暮らしの日常を明るく歌うライブを各地で展開中。昨年はイベントなどで11回公演、どこでも良く受ける。特に同業者に思いが通じる。

キャッチフレーズ

岡森フォレストーズの音楽は、山で強く伸びる桧、まっすぐ育つ杉、愉しく暮らすカメムシだ！

会のモットー(何を大切にしているか)

山にこだわり村がらみの歌作りをしている。「山仕事も村暮らしも捨てたもんじゃないぞ、いいもんだぞ！」とメッセージを発信していきたい。明るさと生活感を大事にしている。

設立から現在に至るまで変化したこと

4人でやっていたが1人がタイへ行ってしまって1名減ったら、イケメン2人と美女1名増えた。ビジュアル的にも音にも厚みが出て華やかになった。

連携している団体・専門家・自治体など

豊橋のライブハウス「ハウス・オブ・クレージー」、岡崎森林組合、額田ふるさと祭り、岡崎市民祭り、FMおかざき

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

矢作川森の健康診断報告会や地域の結婚式、豊田いなかとまちの文化祭、などのイベントを盛り上げている。

現在直面している課題

オリジナル持ち歌は16曲あるが、全員で演奏できるのは6曲かな？もう少し増やさねば。
練習は岡崎森林組合で、月に一度は豊橋のライブハウスで演奏。
出演が近づくと一生懸命練習する、それがないとあまりやらない？

今後やってみたいこと

6人で演奏できる持ち歌と出演・公演機会を増やしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

いろんなイベントに声をかけてください。

チームオリジナルの質問

<質問内容>エピソードを教えてください。

<答え>①手ぬぐいと地下足袋のいつものスタイルで路上ライブを豊橋でやったら、観客がやたら遠巻きになっていた、怖かったのかな？

②公演中南條がMCをやっていたら、オジサマが急に出てきて「君たちの歌は日常を歌っているからとても面白い」と言っておひねりをくれた。3000円入っていた。

その他、伝えたいこと

●眞木宏哉組合長談：

「山を愛し山で生きているものでないと出てこない、そんな言葉で綴られているのがいい。」

「しんどい仕事の中でも、楽しくやろうぜというソウルがビンビン伝わる」

「われら岡森の元気の源、誇りだ。テーマソングなんかそのまま組合の歌にしたい！」

●塚本実並さん談：

「岡森フォレスターズの一番好きなところ？南條さんのMC！

好きな歌ベストスリーは、①すてきな山ガール②山の神に感謝③カメムシの歌」

●歌詞抜粋

♪♪～岡森フォレスターズのテーマ～

山の斜面で転がり落ちて／立ち上がった時ふとひらめいた／川の源流は山の奥にあると／
ならば俺たち最初の1滴になろう／

ギターぶら下げ、ジャンベかかえて山から下りてきた男達／少し調子の外れた演奏だけど／

岩の間から湧き出したような／おかもりフォレスターズ

長生きの秘訣を教えましょう／やまで桜を育ててみましょう／何年もかかる大変な仕事／

でもそのうち見上げるような長い木／

山の力を教えましょう／コンビニなければ自販機もない／とても不自由に思えますが満天の星空／

電気はないけど元気が出る／伐り株に腰おろし耳澄ませば／ほら聞こえてくる鳥のさえずり 男達の歌

* YOUTUBEで視聴できます→<https://www.youtube.com/watch?v=-MHQ9UJbDec>

♪♪～すてきな山ガール～

退屈なこの町といつも思っていたけれど／まんざら捨てたもんじゃない僕の住む町は／

曲がりくねった細い道も傾いたカーブミラーも／それぞれに愛着がある僕の仲間だ／

それに山がある山がある素敵な山がある／緑いっぱい溢れる楽しい山がある／

山ガール山ガール素敵な山ガール／

こんにちわと声がして振り返ったその瞬間に／僕の恋の風船は一気に膨らんだ／

こんな素敵な山がある町に私も住んでみたいとマジに言うので／

僕の風船ますます膨らんで飛行船になった／

ついに現れた僕の太陽 素敵な山ガール／笑顔いっぱい溢れる いとしの山ガール （後略）

* YOUTUBEで視聴できます→https://www.youtube.com/watch?v=UM_lapZtlLU

とにかく山が好きで、山仕事を愛し、山里暮らしを楽しむきこりミュージシャンたち、拍手！！



岡森フォレストーズオールキャスト(左から、甲田、島田、南條、白井、中村、塚本、裏方さん)



南條清二さんの演奏と定番衣装



今夜は盛り上がるぜー！

← 矢作川森の健康診断報告会(2014.10.26)

↙ いなかとまちの文化祭(2015.12.6)
(撮影:久野ゆか氏)



「クサイクサイクサイ! カメムシ ♪ ♪」



蒲郡市漁場環境保全協議会

調査団体名	蒲郡市漁場環境保全協議会	団体代表者名	伊藤幸昌(蒲郡漁業協同組合部長)
設立年	2009年5月	対応してくれた人の名前	伊藤幸昌
団体URL	http://www.hitoumi.jp/torikumi/aichi/2179.php		
活動拠点	蒲郡市	調査員	井上祥一郎、浅田益章
取材日	2015年12月3日	レポート作成者	井上祥一郎(推敲)、浅田益章(作成)

活動内容

太平洋の波風をまともに受け止める三河湾の中央部に漁港がある。蒲郡漁業協同組合には竹島支所、形原支所、西浦支所があり、今回は形原支所(事務局)でお話を伺った。蒲郡市漁場環境保全協議会は漁業者、蒲郡漁協、三谷漁協、三谷水産高校、西浦小学校のメンバーで活動をしている。代表者の伊藤様に今昔と未来にかけのお話をお聴きした。主な活動は、(1)藻場の保全 (2)干潟等の保全 (3)漁村の文化を伝える活動である。

キャッチフレーズ

「なぎさはうみのゆりかご。なぎさは人と海との共生の場」

会のモットー(何を大切にしているか)

「藻場は多くの生き物を育てて、環境を守っています。」

また、蒲郡市漁場環境保全協議会が参加している「三河湾環境再生プロジェクト」(愛知県)では「よみがえれ！生きものの里“三河湾”」を掲げて活動をしている。

設立から現在に至るまで変化したこと

協議会設立前から蒲郡漁協青年部のみなさんは、失われた藻場と干潟の再生に取り組んでいた。三河湾の漁獲量が激減していたからである。人工干潟が造成された1998年から2012年ごろにアマモの移植にチャレンジする。アマモを固定する方法もわからず試行錯誤を繰り返した。協議会設立によって民間会社や三谷水産高校、漁協の漁業者、職員が参加し大いに技術を高めた。今では地元の小学生も種まき作業に参加して体験を重ねている。

連携している団体・専門家・自治体など

- ① 三河湾環境再生プロジェクト推進委員会(学識経験者、NPO、漁業、流通、観光、レジャー関係者、愛知県顧問)
- ② 蒲郡市 農林水産課
- ③ 愛知県 環境部など

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

アマモ(甘藻)再生事業の推進

アマモとは、藻ではなく、海草である。花を咲かせ、実を結び、種子によって繁殖する植物で、生育したアマモは沿岸海域の汚染源を吸収分解し、水質を浄化する。アマモ場は魚介類の成育・産卵の場となる。

- ① アマモ種子の確保(漁業者が天然アマモ場より花枝、種子採取)
- ② 再生場所の調査(専門会社による水深調査)
- ③ 再生基盤「ソステラマット」の敷設(多数の漁業者参加)

現在直面している課題

- ① アマモ場の確保。(三河湾中央にある蒲郡漁協付近の海岸は太平洋からの波により砂の流失にさらされている。)
- ② 若手漁業者の育成。(蒲郡漁協は主に底引き網漁業である。三河湾内と沖合が漁場であるが漁業資源は年々減少している。魅力ある漁業により、地域ぐるみで若い漁業者を確保し育てたい。)

今後やってみたいこと

①アマモ場の拡大と漁業資源の増殖:

アマモの草原は魚介類の産卵・育成の場となっている。増殖のためにワタリガニの放流。アサリの天敵ツメタガイの抑制と有効利用のレシピづくり。地場漁業資源を活用した観光・レジャー、暮らし方など地域の輪を広げたい。

②若手漁業従事者に魅力ある漁場づくりと漁業経営:

三河湾は豊富で多様な魚介類が育っている。地産地消の漁業資源を生かした付加価値の高い漁業に挑戦する。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

今は昔のように資源豊かな海に戻りつつある。蒲郡の漁業はこれから。若手の育成も、これからの課題である。漁師は苦勞することも多いけど、質の良いものが獲れる。蒲郡の漁業は魅力いっぱいである。

愛知県が主導する「三河湾環境再生プロジェクト」活動は産官学民の有益な情報、知恵が期待できる。

①都会と地域の交流:

情報: 伊勢三河湾流域圏全体からみた蒲郡漁協の価値の再発見、ニーズの入手(第6次産業の視点)

②三河湾全体の理解共有。豊川河口の六条潟で生まれたアサリの回遊。矢作川の清流の三河湾水質の改善など。

チームオリジナルの質問

蒲郡市には大きな川が無い。漁場を豊かにするには背後の山からミネラルなどを運ぶ川が必要ではないでしょうか。(答え)

蒲郡市には大きな川はないけど小さな川がたくさんある。それらを通して、町や里山の栄養分が流れていると思う。また、豊川、矢作川の大きな川からほぼ等距離にある蒲郡漁協(竹島、形原、西浦支所)はアサリなど有名である。それらは三河湾全体の閉鎖系海域の恵みとして漁場を豊かにしている。

もっとも、アサリは六条潟からとってきたものも放流している。訪れるたくさんの潮干狩りのお客様の要求に足りる量と質を確保するため。六条潟のおかげである。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 蒲郡の名産。メヒカリについて。初めて聞く魚ですがどんな魚ですか。(漁港内市場で)

<答え>

蒲郡漁協でたくさん水揚げされる「アオメエソ通称目光」です。深海性の魚でキスぐらいの大きさ。この魚の名前は字のごとく目が光輝いているからです。この魚は太平洋側の沖合いに広く生息しています。白身で脂がのっている。大きいサイズは、刺身・開きにして天ぷら又は干物にすると美味です。これからは、この魚を「蒲郡メヒカリ」としてピールしてゆく所存です。

取材者からのひとこと

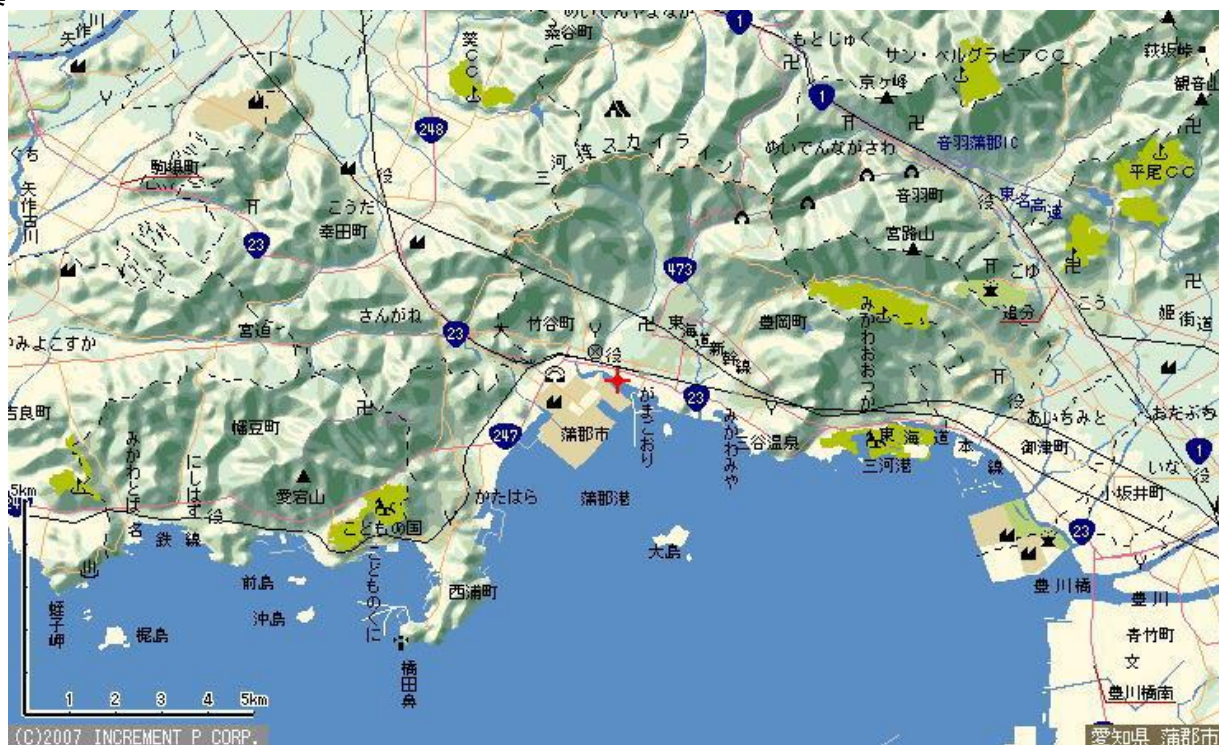
蒲郡市には温泉の観光名所が多い。三谷温泉、蒲郡温泉、形原温泉、西浦温泉。そして、ラグーナ。三河湾の海の幸がいただけるのは嬉しい。今回はゆっくりと味見はできなかったのもまた来たい。できれば、潮干狩り、人工干潟、アオモの茂る頃。海のお花畑を体験したい。

蒲郡漁協には三河湾の漁場を守りたいという強い熱意がある。観光地を控えるこの地域の三河湾の景観と漁業資源は大事な宝である。運命共同体と言える。喜んで漁業を継ぎたいという若者が増えることを祈念します。

アオモの藻場はびっしりと密集するだけでなく、ゆったりと点々と広がる藻場が良いとのこと。そこに住む魚たちがゆったりと産卵、生育するにはゆとりが大事ということを教えてくれる。(矢作川流域圏海部会で学びました。)

人も魚も共存共栄。それがこの三河湾ではできるのではないかと心強く思いました。幸いに矢作川流域懇談会、海部会のメンバーは三河湾環境再生プロジェクトにタッチしている有識者が多い。連携することで矢作川流域圏も良くなっていけると確信しました。矢作川とは河口、小川、道路、地下水脈、地域を通してつながっている。

写真



蒲郡市漁場環境保全協議会のお話を形原支所でお聞きした。三河湾の中央部蒲郡市の海岸沿いにある。右には豊川河口とその周辺の六条潟まで20km。あさりのアサリの稚貝を生み育てる場所。左には矢作川がある。国道23号線で行くと形原支所から20kmの距離。2つの川に挟まれたところにある。背後は山並み三ヶ根山があり、この漁場に大きな川はない。



① 拠点の蒲郡漁業協同組合
形原支所



② 表彰状。漁場環境保全活動。
豊かな海づくり大会会長より



③ 漁港内市場。
大漁旗と名産地魚販売



④ アマ藻の種取り



⑤ 再生したアマ場に稚魚が住む



⑥ 蒲郡メカリ 絶品。
から揚げ最高。上品な味

島を美しくつくる会

調査団体名	: 島を美しくつくる会	団体代表者名	: 鈴木喜代司(会長)
設立年	: 1996年	対応してくれた人の名前	: 鈴木会長、筒井副会長、杉山振興室主査
団体URL	: http://www.sakushima.com/island/tsukurukai/index.php		
活動拠点	: 西尾市 佐久島	調査員	: 井上祥一郎、浅田益章
取材日	: 2015年12月 1-2日	レポート作成者	: 井上祥一郎(推敲)、浅田益章(作成)

活動内容

「佐久島は何もないところ」。島の人はこう思っていたそう。島の豊かな自然や景観はあたりまえのこととして気付いていなかった。島を訪れた人によって島の魅力を知られることとなった。ならば、もっと美しい島をつきたい。ありのままに美しくあれ。お話をいただいたみなさんからそういう思いが伝わってきた。それが実践されている島である。島を美しくつくる会とは島民および島を愛する人々の自主活動である。島民全員が会員である。4つの分科会がある。「ひと里分科会」、「漁師分科会」、「美食分科会」、「いにしえ分科会」。そのほかにさまざまな活動がある。

キャッチフレーズ

なんにもない島。自然のままにアートに癒される美しい島。

会のモットー(何を大切にしているか)

近代化の波にもまれることなくスローライフができるアートと自然があること。

設立から現在に至るまで変化したこと

設立2年後(1996年設立)、アートで島づくりに挑戦していた時。島民になじみのない現代アートを若者にまかせよう！島民漁師には思いつかない発想であった。島外の人の参加や佐久島を応援する人が多くなって今や全国的に訪れたいという人気の島である。

島めぐりをゆっくりとできる佐久島アートピクニック(島中に22カ所に作品)など、落ち着いた癒しの島である。

連携している団体・専門家・自治体など

- ①西尾市役所には「佐久島振興課」がある。佐久島についての広報担当窓口となっている。(今回の取材窓口)
- ②島民全員が会員(250名)であり、島外の応援ボランティアの方も多い。特定の企業や組織とのつながりよりも多様な個人、その道の専門家のつながりや連携が感じられる。マスコミの取材、新聞掲載多い。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- 4つの分科会で多くの活動がされている。今回わずかな時間で現地現物を見て印象的だったことを紹介する。
- ①島外の訪問客がくつろいで佐久島の歴史を知ることができる弁天サロン(西港)。島民の集会の場でもある。
 - ②小学生などが花植えをして育てている島の花壇は美しい活動である。未来につながる。
 - ③佐久島の弁天様(島の中央の筒島にある)願掛けの「願い石」島の有志がここまで立派に整備したことに感銘。佐久島はいにしえからの古墳があり先進のアート造形まである。島全体がパワースポットといえる。

現在直面している課題

- ①漁業後継者問題: 島民漁師の高齢化や漁業経営の不安定性から新規漁業就業者の定住促進の環境整備が必要。
- ②伊勢三河湾の漁場環境の悪化、漁業資源の減少。基本となる漁業あつての佐久島である。豊かな海の幸を守ることが美しい島づくりに欠かせない。

今後やってみたいこと

- ①本当に島にきたい人が作る佐久島にしたい。
大手資本による島の観光化でなく、自然と人工のアートが調和して美しい島としたい。
今やっていることを地道に積み重ねることが島民のため、佐久島にきたい人のためになる。
- ②島への来訪者を平準化できればいい。土日曜日が多く、平日は少ない。4月―11月は多く、12月―3月は少ない。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ①行政と仲良くやっているところは少ない。西尾市と佐久島は町村合併以降役割分担を決めて、いい仕事と関係作りができている。今後も西尾市役所を窓口として佐久島の振興を図ってゆきたい。
マスコミ情報発信、広報など西尾市役所振興課を設けてやっていただいている。
- ②佐久島にある美しい景色、アート、海の幸など。佐久島に訪れるリピーターの方々。平日やシーズンオフの時期に来て喜ばれるような「美しい島づくり」の島民の活動、島外の応援者を増やしてゆきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

島内でよく猫を見かけますが多いいですか？

<答え>

黒猫、ぶち、茶色の猫が多い。ひなたぼっこしている猫。猫は自給自足している。

漁港には猫が多いそうです。猫の写真で有名な動物写真家の岩合光昭さんが佐久島に8月に来て、猫を撮影して名古屋で写真展を行いました。佐久島の猫はアートです。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

昨年は佐久島の「Oyaoya cafeもんぺまるけ」を取材し、事例集に載せました。私もお邪魔しましたがいいお店ですね。？

<答え>

もんぺまるけの神谷さんも「美しい島をつくる会」の会員、リーダーです。島外からの定住者ですがいろいろと工夫して島のお店の魅力づくりをしている。佐久島を見つけて移住を決めた。やりたいことを自由にできる生き方。

取材者からのひとこと

取材の日は、一色港から渡船で佐久島西港に着いた。井上さんと二人で歩いて近くにある弁天サロンでお話を聞きました。そこに、関東方面から見えたという女性の方が見えました。一緒に話を聞きたいようでしたが遠慮して出かけたようでした。

取材と島内案内を終えて宿のさざ波さんへ落ち着いたら、その女性が宿泊してた。三日ほど島に居てあちこち歩き訪ねるとのこと。この島には、そんな多くのポイントがあるのかと驚いた。一つひとつの箇所が味わいあるのだろう。癒しの島であることを実感した。

所詮、一泊の取材では十分に「美しい島をつくる会」を知り得ない。島の魅力でもある。私も来ようと思った。これからのんびりと何回も。平日やシーズンオフの時期にも来たい。なごや大府から本当に近い所である。

幸いに私の友人が黒壁集落を越えた石垣古墳近くの森の中に一人暮らしの別荘を建てて定年後の生活を楽しんでいる。気の合った友人と「何にもない島」で話し明かすのも楽しみです。

佐久島は矢作川流域圏の海の天国。ここから矢作川源流の根羽村のことや矢作川流域圏の人たちのなりわいや伝統文化のことを思い浮かべました。伊勢三河湾流域圏に住む幸せを感じた佐久島でした。



① 西港 弁天サロンでお話を聞きました。



② 佐久島アートピクニック。癒しの島めぐり



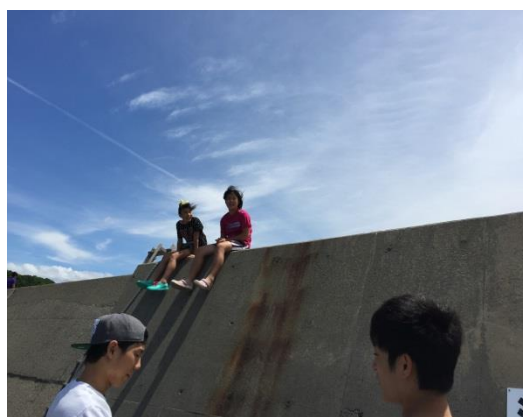
③ 願い石奉納の弁財天(筒島を訪ねる)



④ 願い石に思いを込めて。また来たい。



⑤ 佐久島には猫が多い。宿泊宿のポスター



⑥ 佐久島の子供達。島が大好きと笑う。



⑦ 石垣古墳。いにしへの歴史ある島。

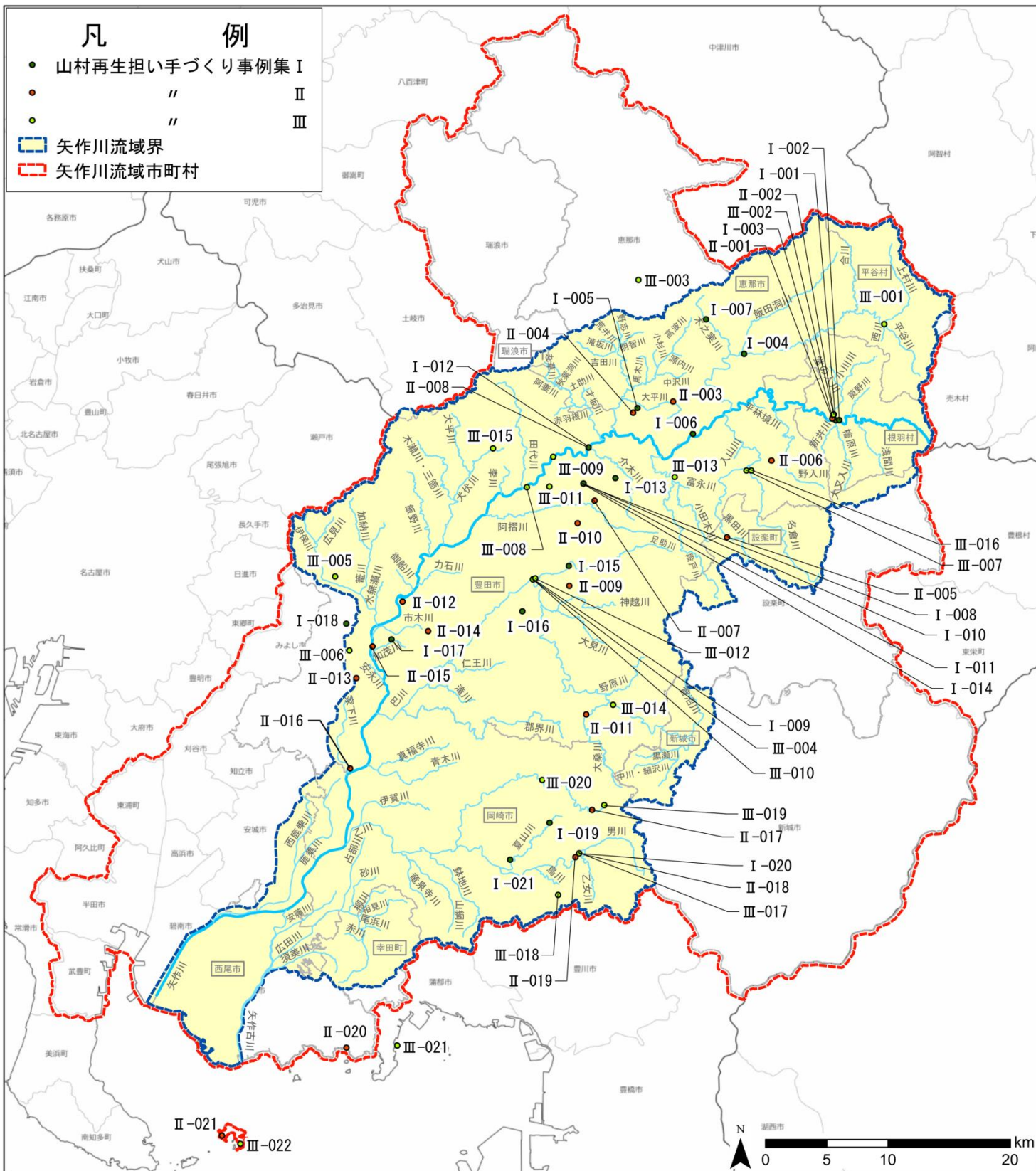


⑧ もんぺまるけ。島を美しくつくる会の会員。

(写真注:①ー⑤は2015年12月1日撮影。⑥ー⑧は2015年6月27日撮影しました。(浅田)

凡 例

- 山村再生担い手づくり事例集 I
- " II
- " III
- 矢作川流域界
- 矢作川流域市町村



長野県下伊那郡平谷村		愛知県豊田市		愛知県北設楽郡設楽町			
Ⅲ-001	飯伊森林組合平谷事務所	I-008	矢作川水系森林ボランティア協議会	Ⅱ-013	アグロ・ブエルタ	Ⅱ-005	たけうち牧場
長野県下伊那郡根羽村		I-009	とよた森林学校	Ⅱ-014	とよたプレイパークの会	愛知県岡崎市	
I-001	根羽村森林組合	I-010	とよた森林学校OB会	Ⅱ-015	NPO法人矢作川森林塾	I-019	NPO法人中部猟蹄会・三州マタギ屋
I-002	ねばり餅	I-011	とよた都市農村交流ネットワーク	Ⅱ-016	矢作川水族館	I-020	岡崎森林組合
I-003	根羽村猟友会	I-012	豊森なりわい塾	Ⅲ-004	おいでん・さんそんセンター	I-021	おおだの森保護事業者会(山留舞会)
Ⅱ-001	木の駅ねばりん実行委員会	I-013	株式会社 M-easy	Ⅲ-005	野外保育 とよた 森のたまご	Ⅱ-017	じさんじの会
Ⅱ-002	きくの会(菊の会)	I-014	旭木の駅プロジェクト(実行委員会)	Ⅲ-006	農村舞台アートプロジェクト	Ⅱ-018	額田林業クラブ
Ⅲ-002	天下杉	I-015	千年持続学校	Ⅲ-007	稲武山里体験推進協議会	Ⅱ-019	宮ザキ園
岐阜県恵那市		I-016	おむすび通貫(一般社団法人物々交換局)	Ⅲ-008	老人福祉センターめぐりの里	Ⅲ-017	岡森フォレストーズ
I-004	恵南森林組合	I-017	green maman	Ⅲ-009	有間竹林愛護会	Ⅲ-018	鳥川ホテル保存会
I-005	串原農林(旧串原林業)	I-018	農業生産法人 みどりの里	Ⅲ-010	あさひ森の健康診断	Ⅲ-019	額田木の駅プロジェクト
I-006	NPO法人 奥矢作森林塾	Ⅱ-006	アンティマキ	Ⅲ-011	あさひ薪づくり研究会	Ⅲ-020	日近太鼓
I-007	NPO法人 福寿の里自然倶楽部	Ⅱ-007	てくてく農園	Ⅲ-012	あすけ聞き書き隊	愛知県西尾市	
Ⅱ-003	山のハム工房 ゴーバル	Ⅱ-008	あさひ若者会	Ⅲ-013	山里センチメンツ	Ⅱ-020	東幡豆漁業協同組合
Ⅱ-004	三宅林業	Ⅱ-009	あすけ里山ユースホステル	Ⅲ-014	しもやま再来るプロジェクト	Ⅱ-021	佐久島Oyaoya cafeもんぺまるけ
Ⅲ-003	夕立山森林塾	Ⅱ-010	新盛里山耕流塾	Ⅲ-015	コレカラ商店	Ⅲ-022	島を美しくする会
		Ⅱ-011	近藤しいたけ園	Ⅲ-016	ファーストハンド	愛知県蒲郡市	
		Ⅱ-012	こいけやクリエイト			Ⅲ-021	蒲郡市漁場環境保全協議会

Ⅰ・山村再生担い手づくり事例集Ⅰ(2014)

Ⅱ・山村再生担い手づくり事例集Ⅱ(2015)

Ⅲ・山村再生担い手づくり事例集Ⅲ(2016)

取材者名

浅田益章

石原 淳(アジア航測)

井上祥一郎(伊勢・三河湾流域ネットワーク)

井上崇也(岡崎市役所)

今村 豊(根羽村森林組合)

宇野利幸(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

大森正昭(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

沖 章枝(水と緑を守る会・岡崎)

桑淳(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

近藤 朗(愛知・川の会)

Siti Norbaizura Binti Md. Rejab(中部ESD拠点)

清水雅子(愛知・川の会)

洲崎燈子(豊田市矢作川研究所)

高橋伸夫(西三河野鳥の会)

田中五月(一般社団法人 ClearWaterProject)

丹羽健司(地域再生機構)

浜口美穂(ライター)

松井賢子

溝口裕太(名古屋大学大学院)

吉橋久美子(豊田市矢作川研究所)

(五十音順)